

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第23集

桜山遺跡

2016

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第23集

さくら やま い せき
桜 山 遺 跡

2016

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、関東随一の大河川である利根川と荒川の2大河川に育まれた肥沃な沖積低地と、台地・丘陵地からなる変化に富んだ豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの貴重な文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、地域の歴史・文化を伝えるばかりでなく、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、このような文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、平成15年度に発掘調査を行った、江南台地の板井地内に所在する桜山遺跡について報告するものであります。今回の調査では、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見され、竪穴住居跡から金銅製耳環が出土するなど多大な成果を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護ならびに学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりますが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、御指導、御協力を賜りました関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市板井1616-2に所在する桜山遺跡（埼玉県遺跡番号65-053）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、江南総合運動公園駐車場造成に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、旧江南町教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第I章第3節のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成15年7月1日から平成15年9月30日までである。整理・報告書作成期間は、平成27年10月1日から平成28年3月25日までである。
- 5 発掘調査および本書の執筆・編集は、森田が行い、熊谷市教育委員会社会教育課職員の支援を受けた。
- 6 発掘調査の現場写真および遺物の写真撮影は、森田が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査にあたって、以下の機関に業務委託を行った。
測量：㈱東京航業研究所
- 9 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

村松 篤

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
遺構全測図… 1 / 400、住居跡・掘立柱建物跡… 1 / 60
- 2 遺構の略記号は、次の通りである。
竪穴住居跡：S I、掘立柱建物跡：S H
- 3 遺構挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。
- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
土器・土製品… 1 / 2 ・ 1 / 3、石器 1 / 1 ・ 1 / 3
- 5 遺物拓影図のうち、土器は向って左側に外面、右側に内面を示した。
- 6 遺物実測図の表現方法は、以下の通りである。
縄文土器・土師器・石器・土製品：白抜き
須恵器断面：黒塗り
- 7 遺物観察表の表記方法は次のとおりである。
 - ・法量の単位はcm、gである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。
 - ・焼成は、以下の3段階に区分した。
A…良好 B…普通 C…不良
 - ・胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。
A：白色粒子 B：黒色粒子 C：赤色粒子 D：褐色粒子 E：赤褐色粒子 F：白色針状物質
G：長石 H：石英 I：白雲母 J：黒雲母 K：角閃石 L：片岩 M：砂粒 N：礫
- 8 石器の実測図において、◀↔▶は磨面の範囲を、◁↔▷は敲打の範囲を示す。
- 9 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。
- 10 住居跡番号は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行った第1次調査地点で3軒の住居跡が確認されていることから、本報告では連番で第4号住居跡以降の番号を付している。
- 11 本遺跡の基準点測量は、日本測地系で行っている。

目 次

序		第2節 遺構と出土遺物	
例 言		1 住居跡	13
凡 例		2 掘立柱建物跡	37
目 次		第3節 遺構外出土遺物	
第I章 発掘調査の概要		1 縄文土器	44
第1節 調査に至る経過	1	2 石器	44
第2節 発掘調査・報告書作成の経過	2	3 土師器	44
第II章 遺跡の立地と環境		4 その他	44
第1節 遺跡周辺の地理的概要	4	第IV章 調査のまとめ	47
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	6	○出土遺物観察表	48
第III章 検出された遺構と遺物		○引用・参考文献	50
第1節 遺跡の概要	10	○報告書抄録	

挿図目次

第1図 埼玉県地形略図	4	第17図 第10号住居跡	26
第2図 江南台地・比企丘陵地質概略図	5	第18図 第11号住居跡(1)	27
第3図 桜山遺跡周辺遺跡分布図	8	第19図 第11号住居跡(2)	28
第4図 調査地点位置図	11	第20図 第12号住居跡(1)	29
第5図 調査地点全体図	12	第21図 第12号住居跡(2)	30
第6図 第4号住居跡(1)	14	第22図 第13号住居跡(1)	31
第7図 第4号住居跡(2)	15	第23図 第13号住居跡(2)	32
第8図 第5号住居跡(1)	16	第24図 第13号住居跡(3)	33
第9図 第5号住居跡(2)	17	第25図 第13号住居跡(4)	34
第10図 第6号住居跡	18	第26図 第14号住居跡	35
第11図 第7号住居跡(1)	19	第27図 第1号掘立柱建物跡	37
第12図 第7号住居跡(2)	20	第28図 第2号掘立柱建物跡	39
第13図 第8号住居跡(1)	21	第29図 第3号掘立柱建物跡	41
第14図 第8号住居跡(2)	22	第30図 第4号掘立柱建物跡	42
第15図 第9号住居跡(1)	23	第31図 第5号掘立柱建物跡	43
第16図 第9号住居跡(2)	24	第32図 遺構外出土遺物(1)	45
		第33図 遺構外出土遺物(2)	46

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表……………	9	第8表	第10号住居跡出土遺物観察表……………	48
第2表	第4号住居跡出土遺物観察表……………	48	第9表	第11号住居跡出土遺物観察表……………	48
第3表	第5号住居跡出土遺物観察表……………	48	第10表	第12号住居跡出土遺物観察表……………	48
第4表	第6号住居跡出土遺物観察表……………	48	第11表	第13号住居跡出土遺物観察表……………	49
第5表	第7号住居跡出土遺物観察表……………	48	第12表	第14号住居跡出土遺物観察表……………	49
第6表	第8号住居跡出土遺物観察表……………	48	第13表	掘立柱建物跡出土遺物観察表……………	49
第7表	第9号住居跡出土遺物観察表……………	48	第14表	遺構外出土遺物観察表……………	49

図版目次

図版1	桜山遺跡航空写真（昭和58年11月撮影）	図版7	第8号住居跡（北より）
図版2	調査区全景写真（北より） 調査区垂直写真		第8号住居跡遺物出土状況（北より） 第8号住居跡耳環出土状況
図版3	第4号住居跡（南東より） 第4号住居跡カマド・貯蔵穴 第4号住居跡カマド 第4号住居跡調査風景 第4・5号住居跡調査風景		第8号住居跡カマド 第8号住居跡掘り方（北より）
図版4	第5号住居跡（東より） 第5号住居跡床面確認状況 第5号住居跡カマド 第5号住居跡調査風景 第5号住居跡カマド調査風景	図版8	第9号住居跡（南東より） 第10号住居跡（南より）
図版5	第6号住居跡（南より） 第6号住居跡掘り方（西より） 第6号住居跡・第2号掘立柱建物跡（東より） 第6号住居跡・第2号掘立柱建物跡	図版9	第11号住居跡（南東より） 第12号住居跡（北より）
図版6	第7号住居跡（南より） 第7号住居跡カマド 第7号住居跡貯蔵穴 第7号住居跡カマド・貯蔵穴 第4・5・7号住居跡調査風景	図版10	第13号住居跡（南西より） 第13号住居跡遺物出土状態 第13号住居跡遺物出土状態 第13号住居跡カマド
		図版11	第14号住居跡（南より） 第1号掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡・第6号住居跡 第1号掘立柱建物跡確認状況 第2号掘立柱建物跡確認状況 第1号掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡 第4・5・7～9号住居跡、第1・2 ・4号掘立柱建物跡

- 第10～13号住居跡、第3号掘立柱建物跡
- 図版12 第4～12号住居跡出土遺物
- 図版13 第12・13号住居跡出土遺物
- 図版14 第13号住居跡出土遺物
- 図版15 第13・14号住居跡出土遺物
掘立柱建物跡出土遺物
遺構外出土遺物

第 I 章 発掘調査の概要

第 1 節 調査に至る経過

平成16年度に行われた、第59回国民体育大会秋季大会における馬術競技場跡地利用として、総合運動公園の造成が当時の江南町において計画された。事業計画地は、立野遺跡（県遺跡No, 65-054）と桜山遺跡（県遺跡No, 65-053）内に位置していた。

立野遺跡については、馬術競技場造成に伴う事前の発掘調査で、墳丘の削平された終末期の古墳11基が確認され（江南町教育委員会：2005）、総合運動公園の調整池と駐車場造成に伴う事前の発掘調査で、終末期の古墳3基と平安時代集落跡と中世の墓壙群が確認された（熊谷市教育委員会：2013）。

桜山遺跡については、駐車場の造成が計画され、平成14年12月27日に試掘調査を実施したところ、現地表面下20～30cmで、平安時代の遺構・遺物が確認された。

試掘調査の結果を踏まえ、町当局との交渉を行ったが、建設計画の変更は困難であるとの判断に至り、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査に先立ち、埋蔵文化財発掘の届出が平成15年6月11日付けで江南町より提出され、埼玉県教育委員会教育長へ副申を添えて送付した。これに対し、平成15年6月26日付け教文第2-23号で発掘調査実施について指示通知があった。

発掘調査にかかる事務は、江南町教育委員会から「埋蔵文化財発掘調査の通知」（平成15年6月18日付江教発第38号）を埼玉県教育委員会へ通知している。



第2節 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成15年7月1日から同年9月30日まで行った。調査面積は約4,092㎡である。6月23日に重機による表土除去作業を開始し、7月1日より作業員による遺構発掘作業と遺構平面図を作成し、9月26日に調査区全景の航空写真撮影を行った。9月30日には、発掘機材等を撤収して現場における作業を終了した。取り上げた埋蔵物は、平成15年10月2日付けで熊谷警察署へ発見届を、平成15年10月23日付けで埼玉県教育委員会へ埋蔵文化財保管証を提出した。これに対し、埼玉県教育委員会より、平成16年5月10日付け教文第5-10号で埋蔵物の文化財認定通知を受理している。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は、平成16年度に遺物の洗浄、注記、遺物の接合、復元作業を実施し、平成27年10月1日から平成28年3月28日まで、遺物の分類、実測作業、遺構の図面整理を行い、遺物の拓本、図版作成を行い、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て、平成28年3月25日に本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 江南町教育委員会

ア 発掘調査：平成15年度

事務局 教 育 長	岡部 弘行
教育次長	大久保光司
次長補佐	栗原 栄子
主 査	新井 端
主 査	森田 安彦
主 事	吉田 正人
主 事	水野 安宏
発掘担当者	森田 安彦

イ 整理・報告書作成：平成28年度

主体者 熊谷市教育委員会

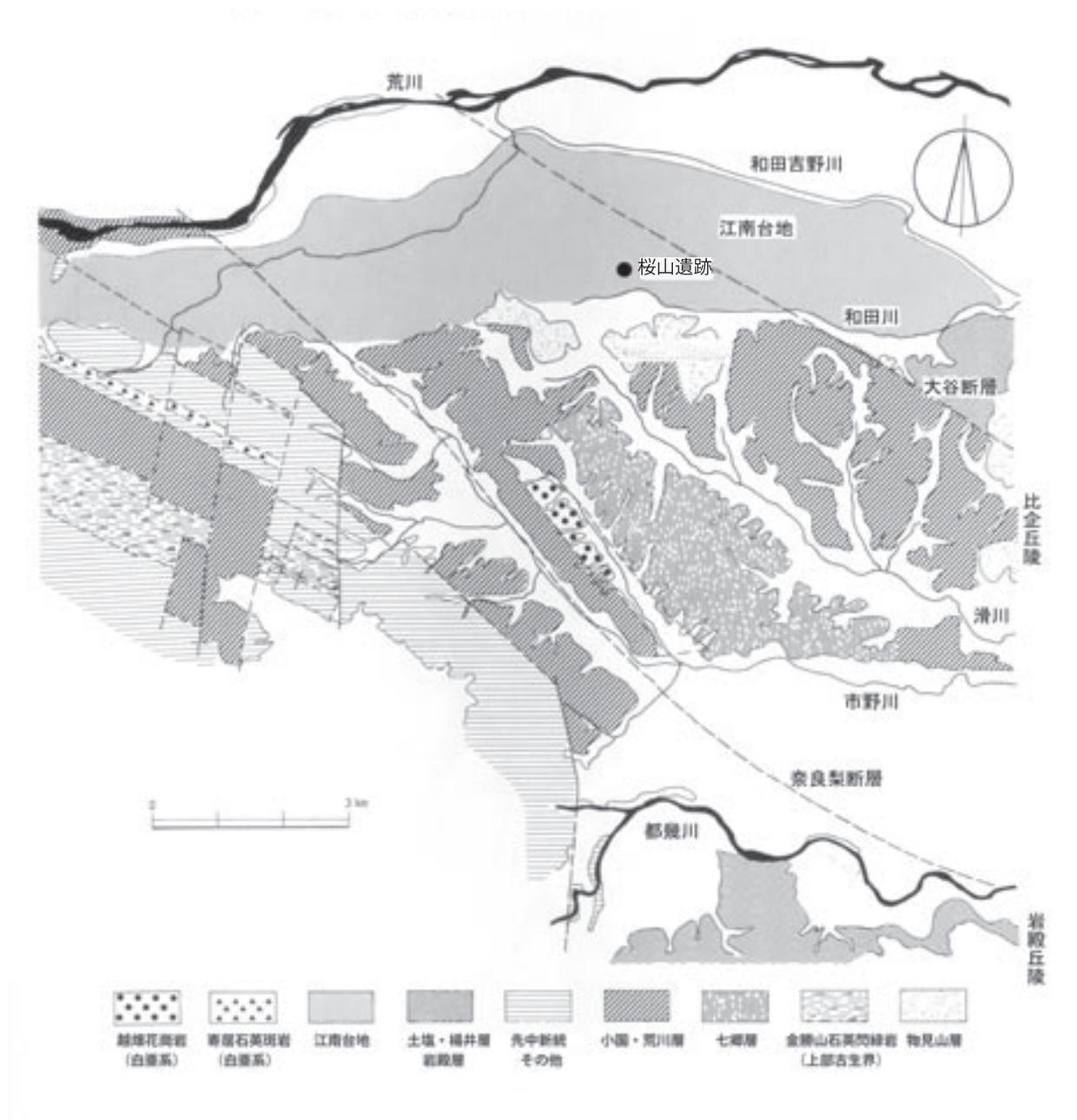
事務局 教 育 長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	山崎 実
社会教育課文化財保護担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健

主 查
主 查
主 查
主 任
主 任
主 任
報告書編集・執筆者

松田 哲
小島 洋一
蔵持 俊輔
山下 祐樹
腰塚 博隆
金子 正之
森田 安彦

泥岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)、荒川層 (砂岩・泥岩の互層で、下部に礫岩を伴う。層厚 (350m)、土塩層 (砂質泥岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)、後期中新世に属する楊井層 (礫岩を主体とし砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m) となり、これらの中新統を不整合に覆って更新世に属する物見山礫層が分布している (比企団体研究グループ：1991)。滑川町福田周辺から産出される通称「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩、熊谷市小江川周辺から産出される通称「小江川石」と呼ばれる白色細粒凝灰岩は、古くは周辺地域に分布する古墳石室石材として利用されている。

今回報告する桜山遺跡は、江南台地上に位置する。台地崖線部から2km程入った、和田吉野川右岸の標高71m前後の南へ傾斜する緩斜面に立地する。現在周辺は、桑畑や畑地に利用されており、豊かな自然景観を育んでいる。



第2図 江南台地・比企丘陵地質概略図 (比企団体研究グループ1991より)

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

桜山遺跡周辺の江南台地上の古墳時代後期から平安時代の歴史的環境について概観する（第3図）。

古墳時代の遺跡は、前期と後期に遺跡が増加し、中期の遺跡は極端に少ない傾向がある。比企丘陵北端から江南台地上を中心に集落が分布し、埴輪や鉄器の生産遺跡、前期・後期の群集墳に特徴が認められる。

古墳時代後期の遺跡は、和田川左岸に集落遺跡が広く展開するようになり、急速に流域の開発が進行した状況がうかがえる。

丸山遺跡（25：江南町：1996）は、7世紀前半に属する住居跡2軒が確認されている。元境内遺跡（22：熊谷市教育委員会：2009）では、3次に渡る調査が実施され、6世紀後半から奈良・平安時代に至る住居跡29軒が確認され、住居跡より、鉄製鋤先、炭化桃核が出土している。諏訪協遺跡（21：熊谷市教育委員会：2009）では、6世紀後半の住居跡2軒が確認されている。宮脇遺跡（20：熊谷市教育委員会：2009）では、6世紀後半の住居跡6軒が確認されており、住居跡からは、炭化桃核、羽口、鉄滓、貝巢穴泥岩が出土している。本田東台遺跡（18：江南町教育委員会：1988）は4次に渡り調査が行われており、6世紀前半から7世紀末にかけての住居跡74軒が確認されている。地形・遺物の散布状況から想定される住居跡数は200軒を超える集落規模と想定され、和田川流域中最大規模の集落となる。住居内からは鉄鏃が出土しており、鍛冶炉も確認されており、鉄滓、羽口等が出土している。

野原古墳群（19：江南町：1995、立正大学博物館：2008）を挟んで分布するこれらの集落跡は、続く奈良・平安時代へと発展的に継続するものである。古墳時代における集落の盛期が、野原古墳群の造営時期と重なることから、野原古墳群を形成した首長層に支配された人々による集落と考えられ、これらの集落から鍛冶関連の遺構・遺物が出土したことは、該期における手工業生産の実態を示すものとして重要である。

この他、宮下遺跡（27：江南村教育委員会：1985、熊谷市宮下遺跡調査会2010）、新田裏遺跡（31：江南町：1995）等で、住居跡が確認されている。

墳墓としては、前方後円墳と円墳が存在しており、円墳は小規模なものが群集墳を形成する 경우가多く、6世紀後半から7世紀前半にかけて築造を開始する例がほとんどである。

本遺跡に隣接する立野古墳群（2：江南町教育委員会：2005、熊谷市教育委員会：2013）は4次に渡る調査が行われ、円墳13基と小石室1基、小石槨1基が確認され、7世紀代の群集墳であることが確認されている。円墳は、その規模と主体部に用いられた石室石材により、直径20mを超える大型円墳（石室：凝灰岩截石）、直径10～20mの中型円墳（石室：凝灰岩截石・川原石）、直径10m以下の小円墳（石室：凝灰岩片）の3つに分類され、第12号墳からは、毛彫りを施した金銅製杏葉2が出土しており注目される。野原古墳群（19）は、前方後円墳を中心として25基程の円墳により構成される。昭和37年に前方後円墳の調査が行われており、全長40m、高さ5m、後円部径16mと計測されている。主体部は、後円部と前方部で凝灰岩截石を用いた横穴式石室が確認されている（柳田：1962）。円墳群については、昭和39年に立正大学考古学研究室が8基の調査を実施している（立正大学博物館：2008）。また、昭和5年には、畑の開墾中にいわゆる「踊る埴輪」1対その他が発見されており、昭和7年に東京帝室博物館に

納められている（亀井：1978）。上前原古墳群（26：江南町教育委員会：2006）は、3基の円墳が確認されており、内1基が調査され、直径17.6mの川原石石材を用いた胴張形の横穴式石室が確認され、7世紀中葉に比定されている。

比企丘陵上に立地する塩古墳群（14：江南町：1982、1999、熊谷市教育委員会：2011）は、第Ⅰ支群（狸塚支群：14）で直径20m前後の円墳8基が確認されている。第27号墳は、直径23.5mを測り、凝灰岩截石石材を用いた横穴式石室が確認されており、石室内からは、金銅製耳環1、碧玉製管玉1、水晶製切子玉10、ガラス製小玉241、鉄鏃等が出土している。第Ⅱ支群（荒井支群：12）は、20基程の円墳群が確認されている。第13号墳で、凝灰岩截石石材を用いた複室構造の横穴式石室が確認されており、7世紀後半の築造が推定されている。第Ⅲ支群（西原支群：11）は、直径10～20mの円墳21基で構成される。第6・7・9・11・18号墳で調査が行われている。第18号墳は、直径22mで支群の中では、最も規模が大きい。凝灰岩截石を用いた複室構造の石室が確認されており、副葬品として銀象嵌装大刀1、銀装大刀1、大刀3、鉄鏃30、鉄地金銅張雲珠1、同辻金具2、同帯留金具1、胴釧3、金銅製耳環1、碧玉製管玉2、琥珀玉5、土製丸玉2が出土しており、6世紀後半の築造が推定されている。第Ⅳ支群（諸ヶ谷支群：15）は、方墳3基によって構成される小規模な支群。発掘調査は行われていない。第Ⅴ支群（明賀支群：16）は、方墳9基によって構成される。1基が調査されており、4世紀代の構築と推定されている。第Ⅵ支群（栗崎・神田支群：17）は、円墳3基が確認されているが、発掘調査は行われておらず詳細は不明である。

この他、嵐山町域には、52基以上の古墳が10支群に分かれて分布する古里古墳群の駒込支群（10・嵐山町遺跡調査会：1987）、尾根支群（9）、尾根西支群（8）、北田支群（5）、上土橋支群（6）、二塚支群（7）、藤塚支群（4）等がある。

この他生産遺跡では、埴輪窯が、姥ヶ沢遺跡（32：江南町千代遺跡群発掘調査会：1998）で9基、権現坂遺跡（28：小澤：1964、江南町千代遺跡群発掘調査会1999）で2群7基が確認されている。

桜山遺跡の立地する荒川右岸一帯は、古代における男衾郡に比定されている。その郡域は、地形的に北は荒川、西は外秩父山地により画され、台地・河岸段丘・丘陵上に広がりを見せている。「和名抄」によれば男衾郡は、榎津郷・鴉倉郷・郡家郷・多留郷・川面郷・幡々郷・大山郷・中村郷の八郷からなる、武蔵国の中郡として位置づけられている。郷の比定地に関しては、現在残された地名からその地を特定することは困難であるが、江南地域西部から旧川本町東部にかけての地域を、男衾郡の大領壬生吉志福正が居住した榎津郷に比定する見解が有力視されている。

奈良時代に入り、7世紀後半から8世紀前半頃に形成された集落遺跡として、本遺跡の桜山遺跡（1）、鹿嶋遺跡（23：立正大学熊谷校地遺跡調査室：1979）、荒神脇遺跡（24：埼玉県遺跡調査会：1974）、岩比田遺跡（3：岩比田遺跡調査会：1983）、塩西遺跡（13）などの各遺跡がある。8世紀中葉から後半頃には新田裏遺跡（31）、富士山遺跡（30）が集落として形成されていく。

平安時代の9世紀に入ると、遺跡が増加傾向になる。その要因としては、寺内古代寺院跡（34：江南町：1995、江南町教育委員会：2002、熊谷市教育委員会：2010）の存在が挙げられる。寺内古代寺院跡は、8世紀前半には創建され、9世紀中葉から後半頃に最盛期を迎えている。寺院の周囲を外界と区切る大溝が、北辺570m、東辺170m、西辺200m程が確認されている。伽藍内には、基壇建物跡が4基確



第3図 桜山遺跡周辺遺跡分布図

認められ、伽藍の東側には50軒以上の住居跡が確認された集落をかかえ、南側には参道と推測される道路跡が確認されている。

また、この寺内遺跡の西側に隣接する、深谷市百済木遺跡（35：川本町遺跡調査会：2003）では、8世紀初頭に位置づけられる豪族居宅跡と推測される遺構が確認されている。柵列による区画内に、大型掘立柱建物跡と大型竪穴住居跡が配されており、古代男衾郡の成立を考えるうえで重要な位置を占めるものと考えられている。

この他、新田裏遺跡（31）、熊野遺跡（埼玉県遺跡調査会：1974）、岩比田遺跡（3）、野原丸山遺跡（25）、立野遺跡（2）、西遺跡（29：江南町：1995）などで9世紀代の集落跡が確認されている。岩比田遺跡からは須恵器の円面硯や棹秤の錘などが出土している。

10世紀後半以降になると、遺跡の数は極端に減少する。塩西遺跡（13）・宮下遺跡（27）では、土師器の羽釜が出土している。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	桜山遺跡	10	古里古墳群駒込支群	19	野原古墳群	28	権現坂埴輪窯跡群
2	立野古墳群	11	塩古墳群西原支群	20	宮脇遺跡	29	西遺跡
3	岩比田遺跡	12	塩古墳群荒井支群	21	諏訪脇遺跡	30	富士山遺跡
4	古里古墳群藤塚古墳群	13	塩西遺跡	22	元境内遺跡	31	新田裏遺跡
5	古里古墳群北田支群	14	塩古墳群狸塚支群	23	鹿嶋遺跡	32	姥ヶ沢遺跡
6	古里古墳群上土橋支群	15	塩古墳群諸ヶ谷支群	24	荒神脇遺跡	33	西原遺跡
7	古里古墳群二塚支群	16	塩古墳群明賀支群	25	野原丸山遺跡	34	寺内古代寺院跡
8	古里古墳群尾根西支群	17	塩古墳群栗崎・神田支群	26	上前原古墳群	35	百済木遺跡
9	古里古墳群尾根支群	18	本田・東台遺跡	27	宮下遺跡		

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

遺跡は、江南台地上の標高70m前後の南側に緩やかに傾斜する、台地崖線部より2km程入った地点が調査区となっている。遺跡の南側には、荒川の支流である和田川が東流しており、集落を営むには好立地となっている。

遺跡は、約360,000㎡の範囲で広がる。山林と畑が主体となる地区となっており、奈良・平安時代の土器片が採取されていた。

第1次発掘調査は、埼玉県立循環器・呼吸器病センターの建設に伴い、平成4年7月1日から9月30日までの期間、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により3,500㎡の調査が行われている（第4図）。奈良時代の住居跡3軒、土壇、溝跡の遺構が検出され、土師器・須恵器・羽口・縄文時代前期諸磯a式土器、石器等が出土している（財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1995）。注目される遺物として、遺構外よりカシワ葉の圧痕を残す小形土器が出土している。また、試掘調査時には、鞆の羽口が1点出土しており、付近に鍛冶関連遺構の存在が指摘されている。

今回の調査は、第2次調査となり、第1次調査の東側150m程の地点となっている。調査期間は、平成15年7月1日から9月30日まで行い、調査面積は4,092㎡である。

調査区は、国土方眼座標第IX系に基づいて、10mグリットを設定した。グリットは、北西隅を起点とし、X軸にA～Gグリット、Y軸にI～Ⅷグリットを設けている（第5図）。

調査の結果、遺構は、7世紀末から9世紀の住居跡11軒と掘立柱建物跡5棟が検出されている。住居跡は、調査区内北東から南西方向にL字形に分布し、カマドは、北東側に設けるもの7軒、北西方向に設けるもの2軒、南西方向に設けるもの1軒、不明1軒となっている。第8号住居跡からは、金銅製耳環が1点出土しており注目される。掘立柱建物跡は、4軒が主軸方向N-Eへ27～30°で、住居跡とほぼ同じ分布状況となっている。

遺物は、遺構出土の土師器・須恵器の他、遺構外より縄文時代前期諸磯式土器、中期連弧文土器、加曾利E式土器、胴部隆帯文土器、石器類が少量出土している。



第4図 調査地点位置図



第5図 調査地点全体図

第2節 遺構とその出土遺物

1. 住居跡

住居跡は、11軒が調査区の北東から南西方向にかけて分布している。カマドは、北東方向に持つもの（第4・6・7～9・12・13号住居跡）と、北西方向に持つもの（第10・11号住居跡）、南西方向に持つもの（第5号住居跡）がある。調査区の北西と南東側は住居跡が確認されていない。

第4号住居跡（第6・7図、図版3・12、第2表）

【位置】D・E-V・VIグリットに位置する。西側に第5号住居跡、南側に第7号住居跡、東側には第4号掘立柱建物跡が位置している。

【形状】平面形は北東側にカマドを持つ方形で、北東南西5.3m×南東北西5.1mの規模である。住居北東壁の南寄りに位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-60°-Eを示す。住居壁は、北東壁で22cm、南西壁で25cm立ち上がる。壁下には壁溝が巡り、カマド部と、南西壁の一部が幅80cm程途切れている。床面はほぼ平坦となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P1：直径29cm、深さ38cm、P2：直径32cm、深さ42cm、P3：直径28cm、深さ40cm、P4：直径37cm、深さ36cmを測る。カマド脇南側に直径67cm、深さ41cmの貯蔵穴が位置している。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

カマドは両袖が造り付けで、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。第10層の上面が最終の火床となる。

【遺物】遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第7図1は須恵器甕の口縁部片。推定口径24.0cmを測る。内外面に灰釉が認められる。2は須恵器杯の底部。3は、外反する土師器甕の口縁部片。推定口径21.2cmを測る。

【時期】本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

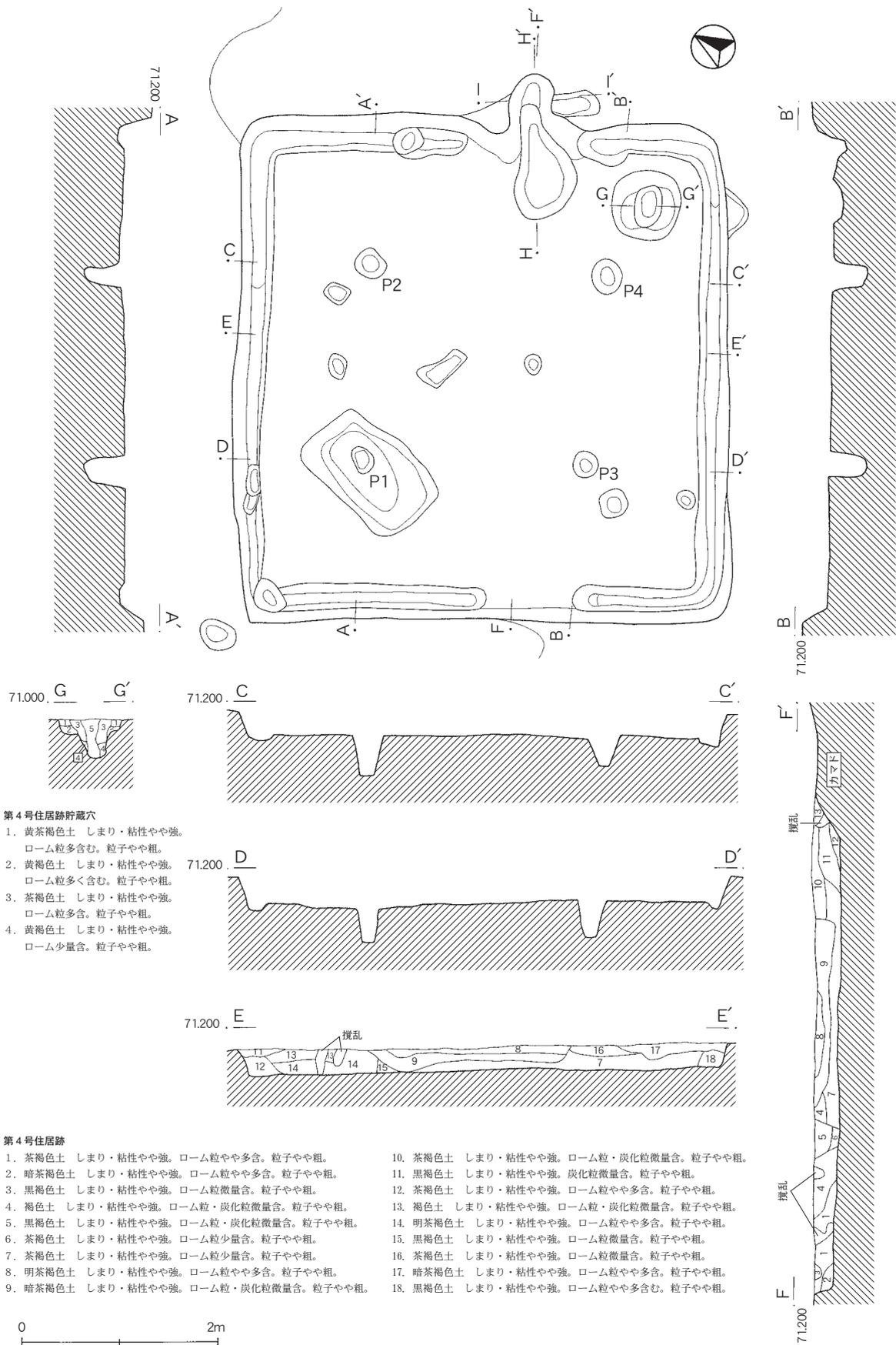
第5号住居跡（第8・9図、図版4・12、第3表）

【位置】D-V・VIグリットに位置する。東側に第4号住居跡が近接して位置している。

【形状】平面形は南西側にカマドを持つ方形で、北東南西4.8m×南東北西4.9mの規模である。住居南西壁の南寄りに位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-124°-Wを示す。住居壁は、北東壁で25cm、南西壁で28cm立ち上がる。壁下には壁溝が巡り、カマド部と、北西隅と北東中央の一部が50cm程途切れている。床面はほぼ平坦となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P1：直径36cm、深さ36cm、P2：直径28cm、深さ41cm、P3：直径47cm、深さ27cm、P4：直径36cm、深さ32cmを測る。カマド脇南側に長径82cm、深さ43cmの貯蔵穴が位置している。

住居覆土は斜面上位からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

カマドは両袖が造り付けで、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる



- 第4号住居跡貯蔵穴**
1. 黄茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含む。粒子やや粗。
 2. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多く含む。粒子やや粗。
 3. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 4. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム少量含。粒子やや粗。

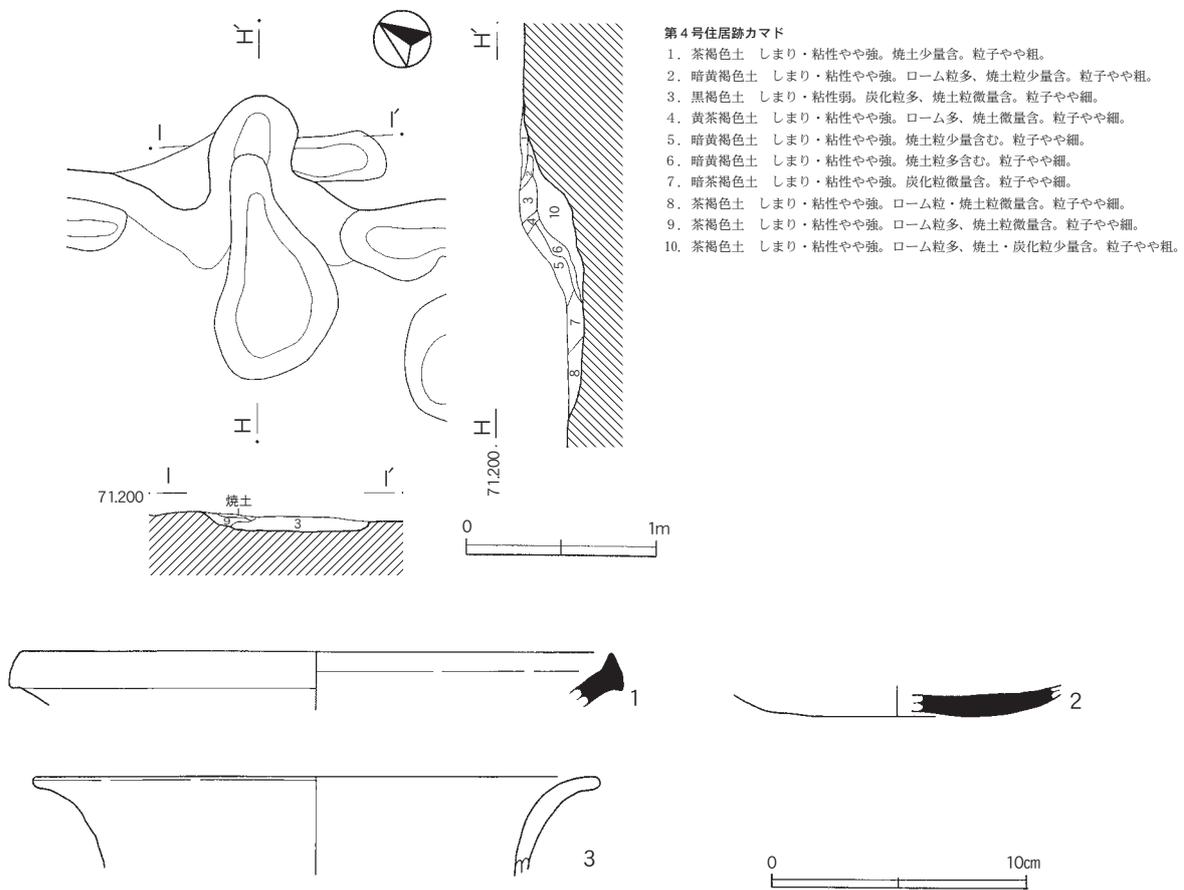
- 第4号住居跡**
1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 2. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
 4. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
 5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
 6. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
 7. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
 8. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 9. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
 10. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
 11. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。炭化粒微量含。粒子やや粗。
 12. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 13. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
 14. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 15. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
 16. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
 17. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 18. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含む。粒子やや粗。

第6図 第4号住居跡(1)

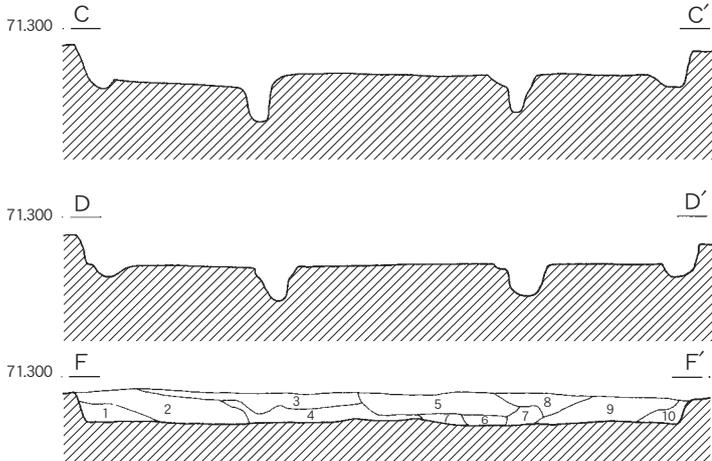
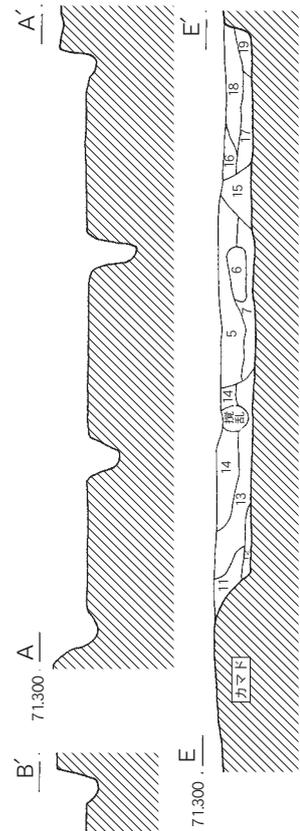
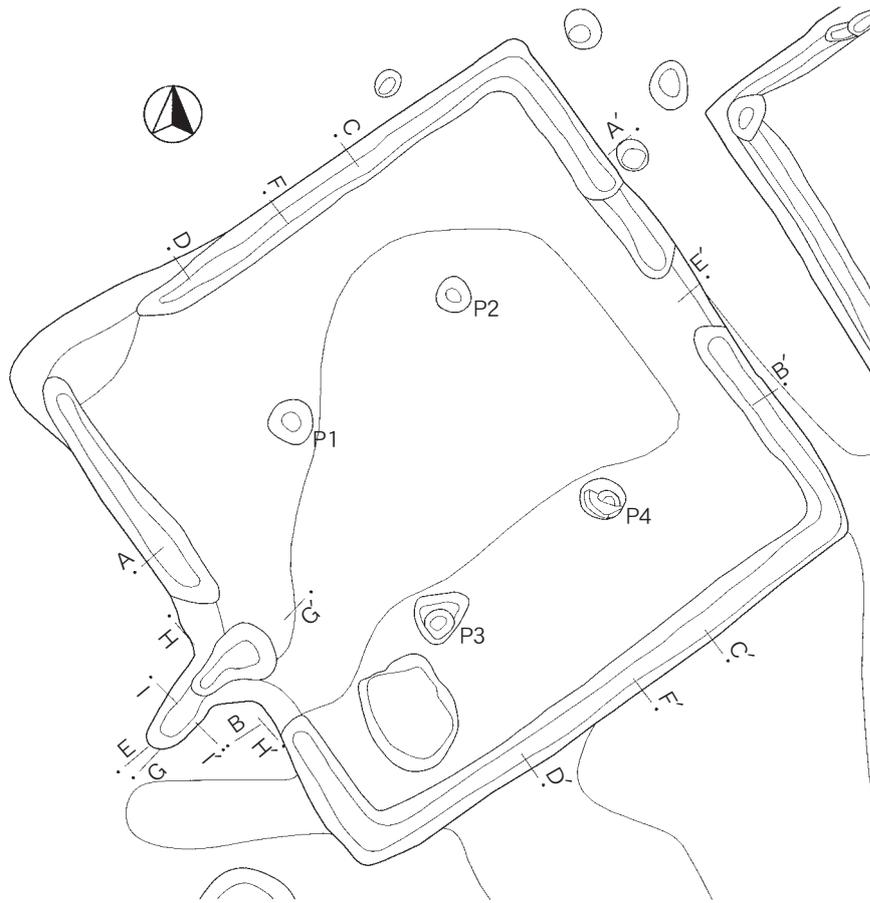
構造をとる。第4層の下面が最終の火床となる。

〔遺物〕遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第9図1は、土師器坏片。内面に暗文が施されている。推定口径11.9cmを測る。2は、土師器坏片。内面に暗文が施されている。推定口径13.0cmを測る。1・2は、口縁部に横ナデ、体部外面を篋削りし、体部と口縁部の境に僅かな稜を有する特徴から、大里・北埼玉地域を中心に分布する在地方系暗文土器である。

〔時期〕本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。



第7図 第4号住居跡（2）



第5号住居跡

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多。炭化粒微量含。粒子やや粗。
2. 明黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量。炭化粒微量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
4. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
5. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
6. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
7. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。
8. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。
9. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
10. 黒茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
11. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒・炭化粒微量含。粒子やや細。
12. 灰茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒・炭化粒微量、粘土粒少量含。粒子やや細。
13. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量、粘土粒少量含。粒子やや細。
14. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
15. 黒褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗い。
16. 黒茶褐色土 しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗い。
17. 茶褐色土 しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
18. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
19. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。



第8図 第5号住居跡(1)

第6号住居跡 (第10図、図版5・12、第8表)

[位置] C-Vグリットに位置する。東側に第2号住居跡が近接して位置している。

[形状] 平面形は東側にカマドを持つ長方形で、東西3.0m×南北2.6mの規模である。住居南東壁の中央に位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-122°-Wを示す。住居内北西1/3が攪乱を受けている。住居壁は、北東壁で25cm、南西壁で15cm立ち上がる。壁溝、柱穴は検出されていない。床面はほぼ平坦で、カマド脇南側に直径46cm、深さ38cmの貯蔵穴が位置している。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

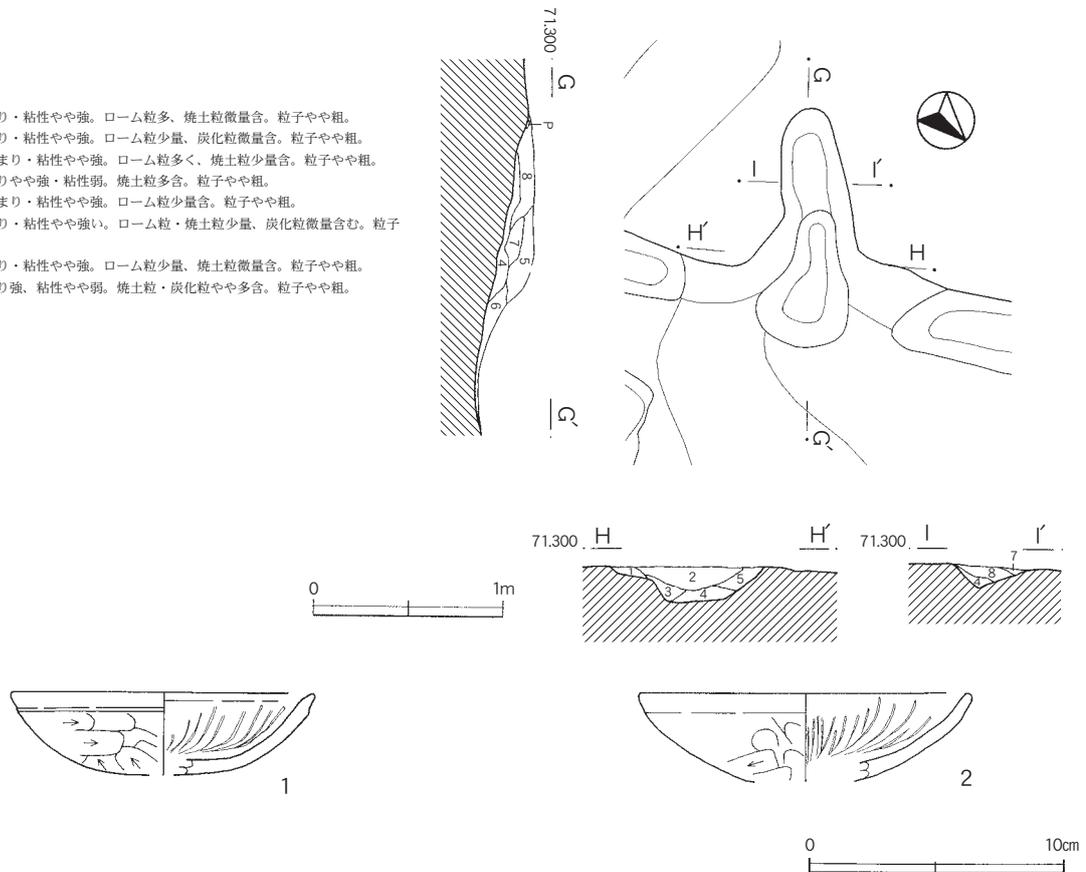
カマドは両袖が造り付けて、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

[遺物] 遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第10図1は、須恵器坏片。推定口径13.0cmを測る。胎土に白色針状物質を含む南比企産。2は、須恵器坏片。推定口径14.0cmを測る。末野産。3は、大形の埴の口縁部片。推定口径22.0cmを測る。4は、土錘。長さ5.3cmを測る。

[時期] 本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、9世紀前半と考えられる。3の埴は、古墳時代前期であり混入と判断した。

第5号住居跡カマド

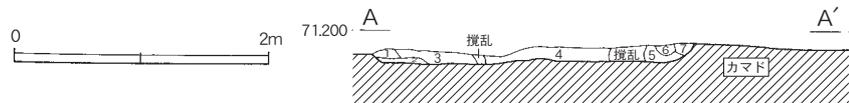
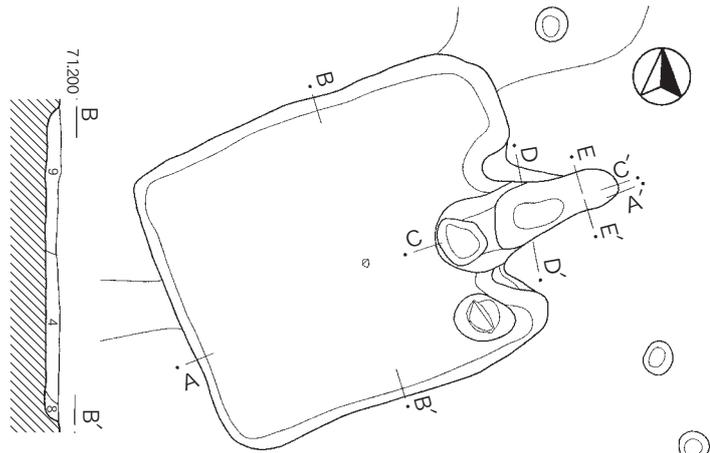
1. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、炭化粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多く、焼土粒少量含。粒子やや粗。
4. 黄褐色土 しまりやや強・粘性弱。焼土粒多含。粒子やや粗。
5. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
6. 茶褐色土 しまり・粘性やや強い。ローム粒・焼土粒少量、炭化粒微量含む。粒子やや粗。
7. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、焼土粒微量含。粒子やや粗。
8. 暗褐色土 しまり強、粘性やや弱。焼土粒・炭化粒やや多含。粒子やや粗。



第9図 第5号住居跡 (2)

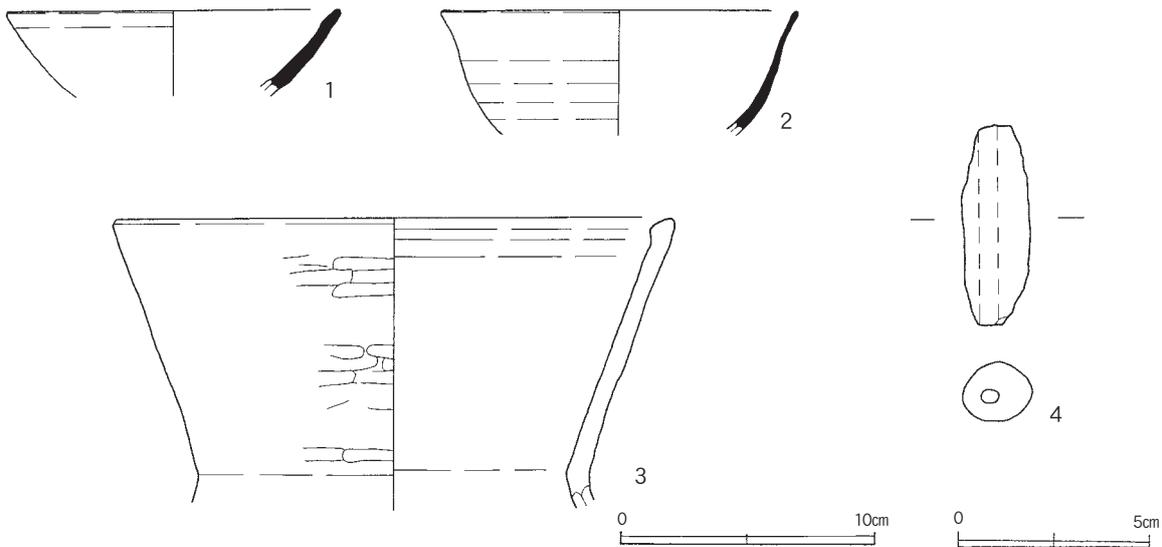
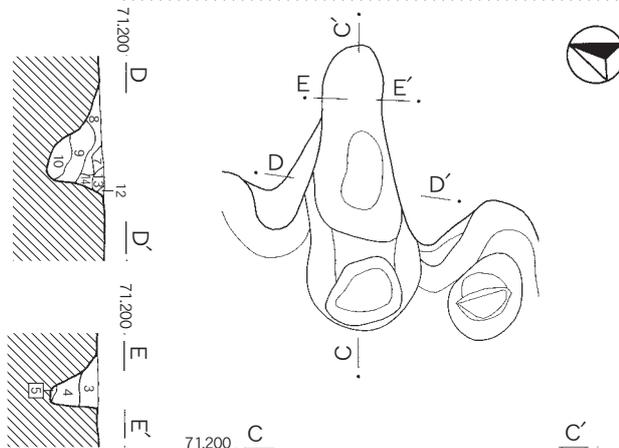
第6号住居跡

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含む。粒子粗。
5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒・焼土粒微量含。粒子粗。
6. 焼土
7. 暗赤褐色土 しまり強、粘性弱。焼土粒多含。粒子粗。
8. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子粗。
9. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。

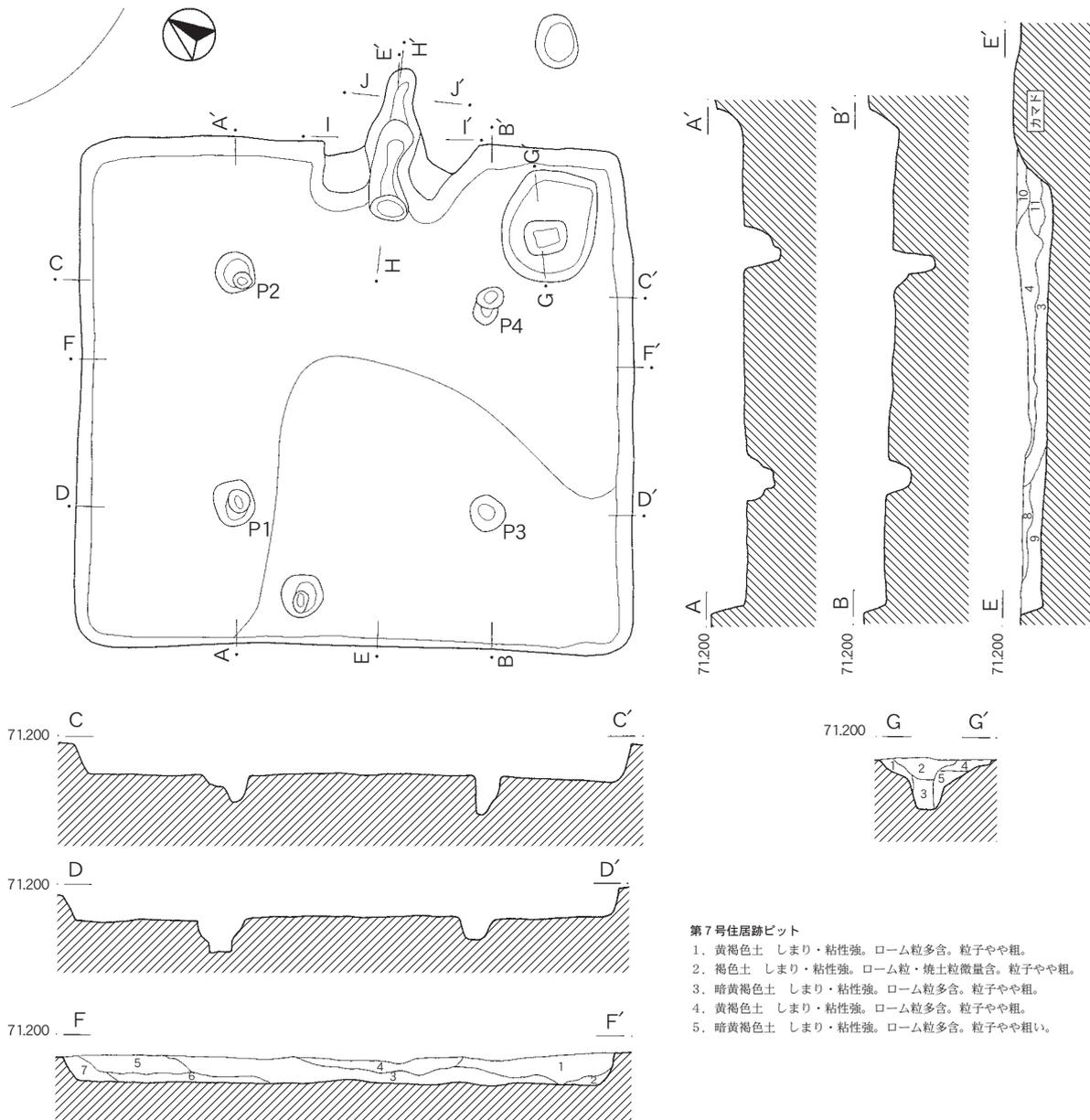


第6号住居跡カマド

1. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒やや多含。粒子粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒少量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや粗。
4. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒少量含む。粒子やや粗。
5. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒多含。粒子やや粗。
6. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒多含。粒子粗。
7. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子粗。
8. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒微量含。粒子やや粗。
9. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや粗。
10. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや粗。
11. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒微量含。粒子やや粗。
12. 黄褐色土 しまり・粘性やや強い。焼土粒多、ローム粒少量含。粒子やや粗。
13. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒多く、ローム粒微量含。粒子やや粗。
14. 赤褐色土 しまり強、粘性弱。焼土粒多含。粒子やや粗。



第10図 第6号住居跡



- 第7号住居跡ビット
- 1. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 - 2. 褐色土 しまり・粘性強。ローム粒・焼土粒微量含。粒子やや粗。
 - 3. 暗黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 - 4. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 - 5. 暗黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗い。

- 第7号住居跡
- 1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
 - 2. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 - 3. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
 - 4. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
 - 5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒微量含。粒子やや粗。
 - 6. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
 - 7. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 - 8. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 - 9. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
 - 10. 黄茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 - 11. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多、焼土粒微量含。粒子やや粗。



第11図 第7号住居跡 (1)

第7号住居跡 (第11・12図、図版6・12、第5表)

[位置] E・F-VIグリットに位置する。北側に第4号住居跡が近接して位置している。

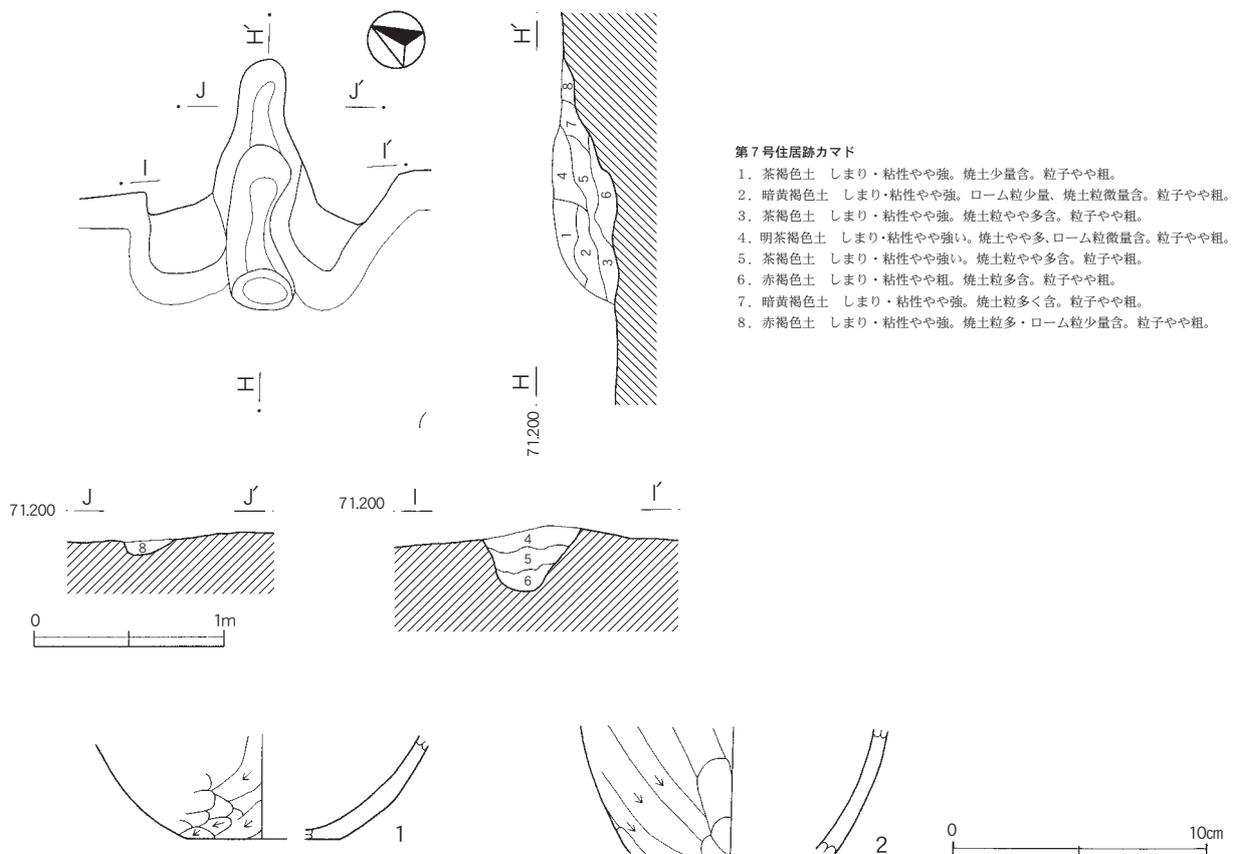
[形状] 平面形は北東側にカマドを持つ方で、北東南西4.4m×南東北西4.7mの規模である。住居北東壁のほぼ中央に位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-52°-Eを示す。住居壁は、北東壁で28cm、南西壁で22cm立ち上がる。壁溝は検出されていない。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P1：直径41cm、深さ24cm、P2：直径36cm、深さ32cm、P3：直径31cm、深さ22cm、P4：直径35cm、深さ38cmを測る。カマド脇南側に長径102cm、深さ46cmの貯蔵穴が位置している。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

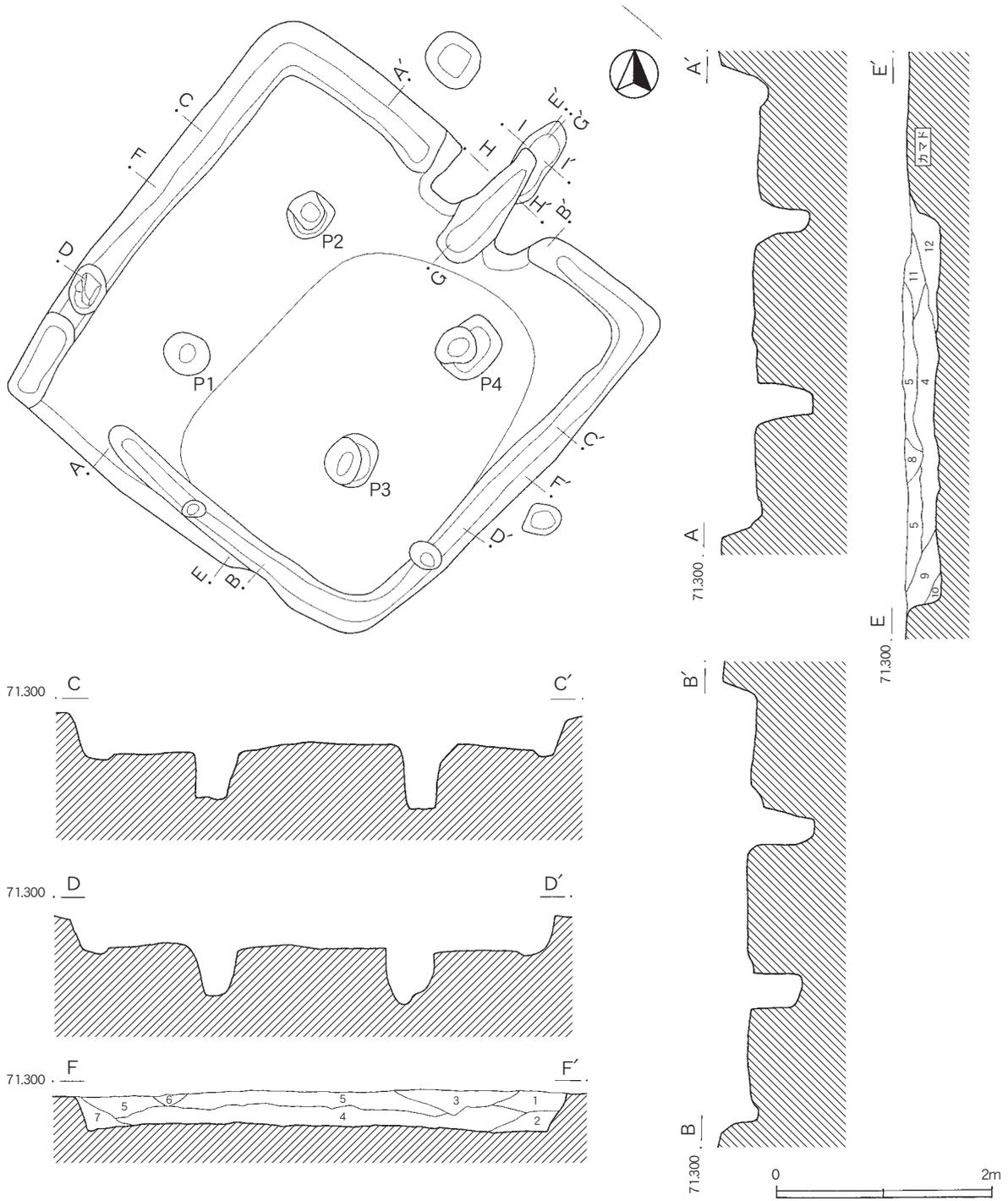
カマドは両袖が造り付けで、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

[遺物] 遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第12図1は、土師器甕の底部片。推定底径4.1cmを測る。2は土師器甕の胴部下半片。

[時期] 本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、7世紀～8世紀と考えられる。



第12図 第7号住居跡 (2)



第8号住居跡

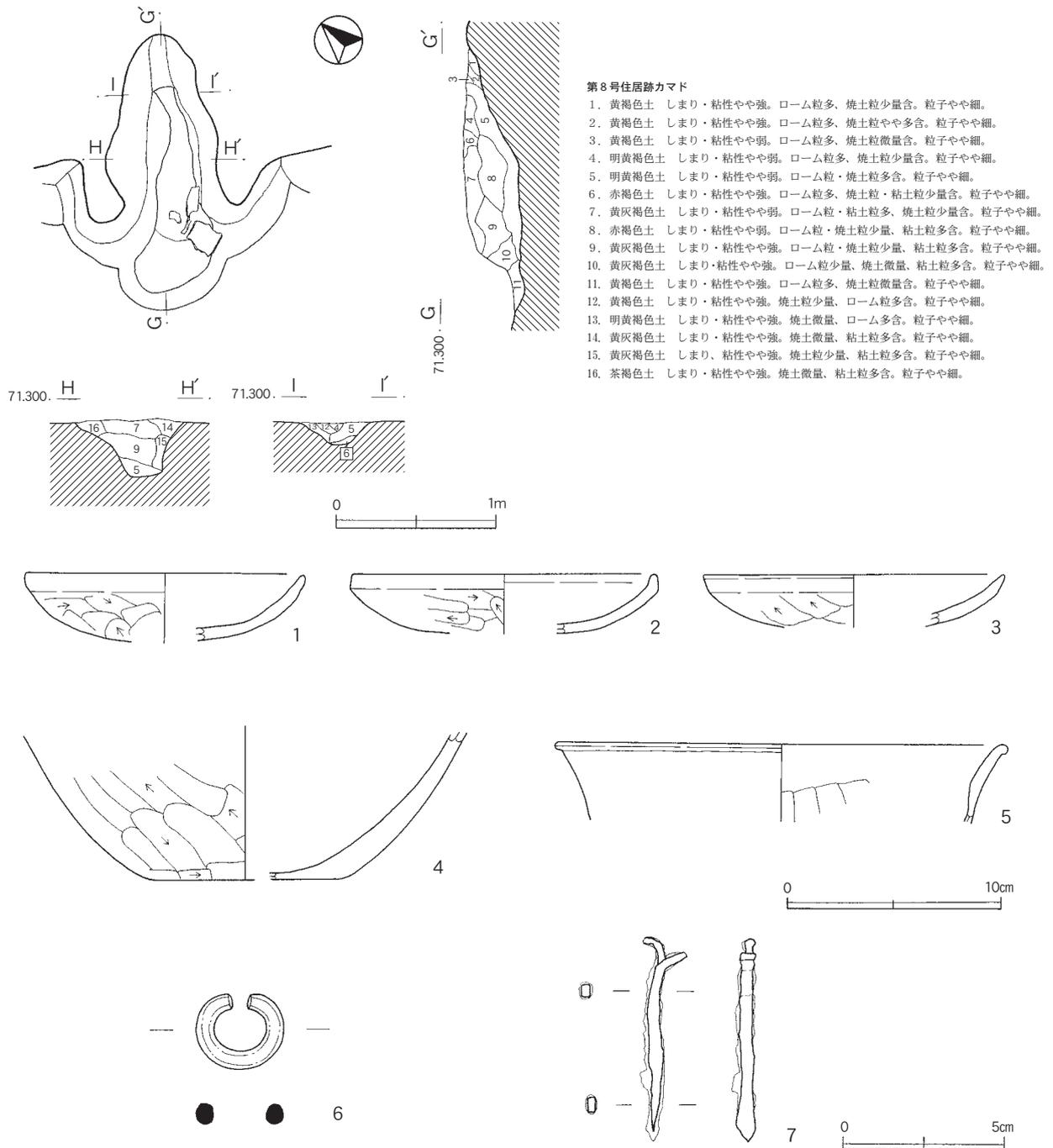
1. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
6. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
8. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
9. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
10. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
11. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
12. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。

第13図 第8号住居跡（1）

第8号住居跡 (第13・14図、図版7・12、第6表)

[位置] A・B-VIグリッドに位置する。東側に第9号住居跡が位置している。

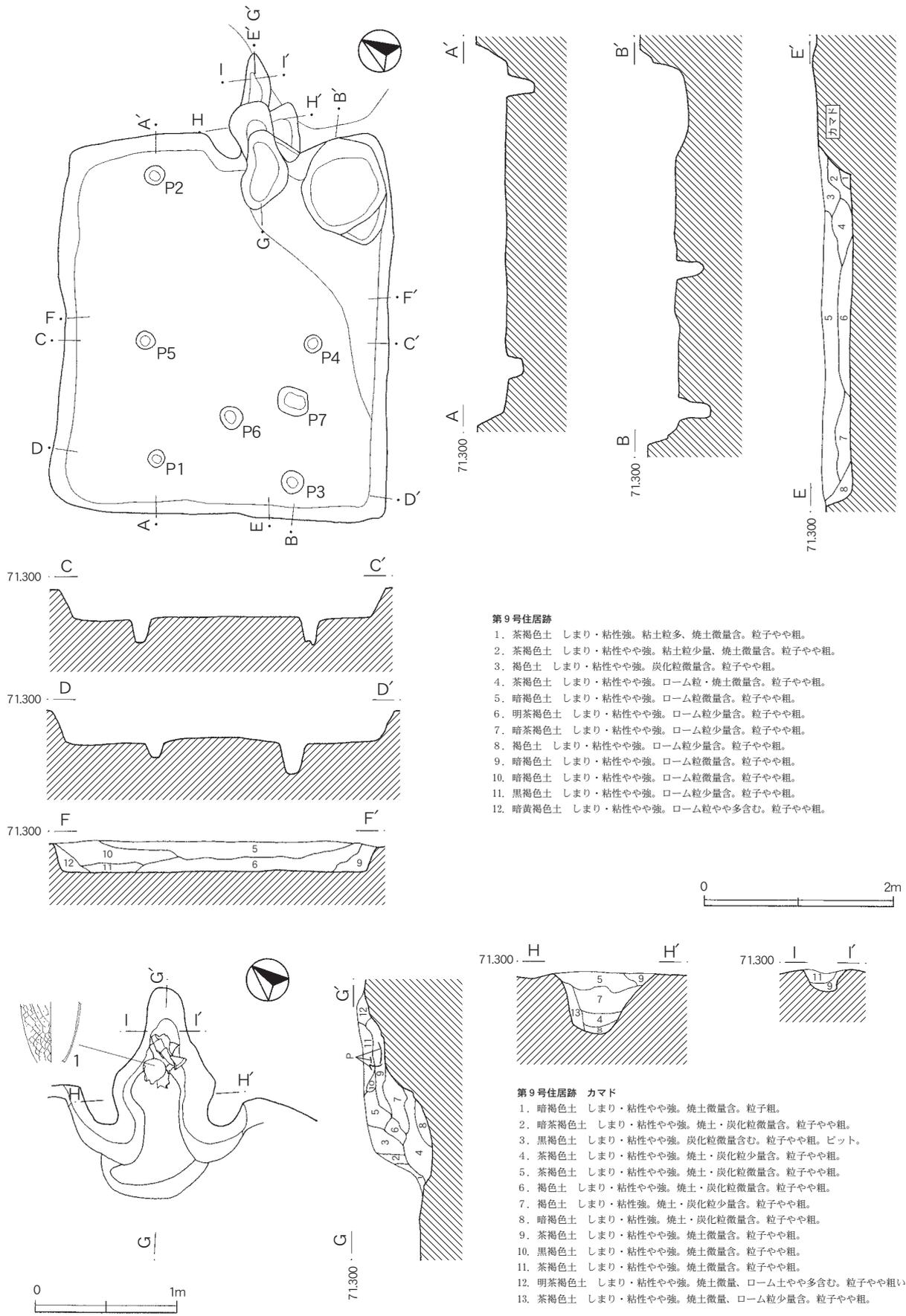
[形状] 平面形は北東側にカマドを持つ方で、北東南西4.6m×南東北西4.6mの規模である。住居北東壁の中央に位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-43°-Eを示す。住居壁は、北東壁で32cm、南西壁で28cm立ち上がる。壁下には壁溝が巡り、カマド部と、南西隅の一部が70cm程途切れている。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P1：直径43cm、深さ53cm、P2：直径41cm、深さ52cm、P3：直径52cm、深さ48cm、P4：直径62cm、深さ63cmを測り、



第8号住居跡カマド

1. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒少量含。粒子やや細。
2. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒やや多含。粒子やや細。
3. 黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや細。
4. 明黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多、焼土粒少量含。粒子やや細。
5. 明黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒・焼土粒多含。粒子やや細。
6. 赤褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒・粘土粒少量含。粒子やや細。
7. 黄灰褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒・粘土粒多、焼土粒少量含。粒子やや細。
8. 赤褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒・焼土粒少量、粘土粒多含。粒子やや細。
9. 黄灰褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒少量、粘土粒多含。粒子やや細。
10. 黄灰褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、焼土微量、粘土粒多含。粒子やや細。
11. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや細。
12. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒少量、ローム粒多含。粒子やや細。
13. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。焼土微量、ローム多含。粒子やや細。
14. 黄灰褐色土 しまり・粘性やや強。焼土微量、粘土粒多含。粒子やや細。
15. 黄灰褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒少量、粘土粒多含。粒子やや細。
16. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土微量、粘土粒多含。粒子やや細。

第14図 第8号住居跡 (2)



第15図 第9号住居跡 (1)

P 2～4は建替えが確認される。貯蔵穴は検出されていない。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層およびカマド内より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

カマドは両袖が造り付けで、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

〔遺物〕カマド内より土師器甕片が出土しており、本住居跡廃絶時の遺物と判断される。その他の遺物は、覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第14図1～3は、土師器坏片。丸底を呈し、口縁部に横ナデ、体部外面を篋削りし、体部と口縁部の境に僅かな稜を有する。4は、土師器甕の底部片。5は、外反する土師器の甕。推定口径21.0cmを測る。6は、床面から10cm程上部より出土した金銅製耳環。長径2.6cmを測る。7は、鉄製釘。先端部を欠損し、基部が二股に分岐している。長6.4cmを測る。

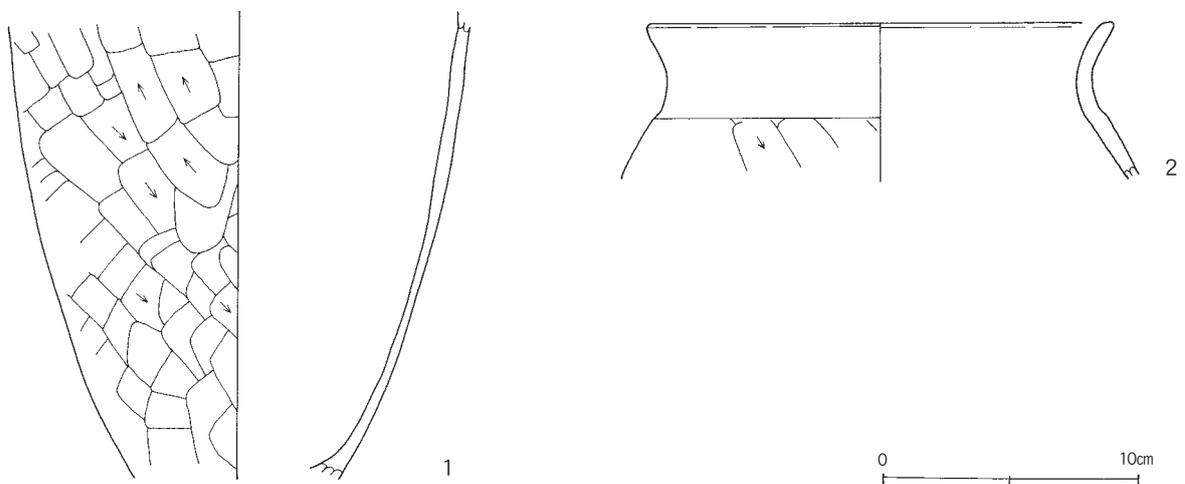
〔時期〕遺物から見た本住居の営続期間は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

第9号住居跡（第15・16図、図版8・12、第7表）

〔位置〕B・C-VI・VIIグリットに位置する。西側に第8号住居跡が位置している。

〔形状〕平面形は北東側にカマドを持つ方形で、北東南西4.2m×南東北西3.4mの規模である。住居南西壁の南寄りに位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-58°-Eを示す。住居壁は、北東壁で40cm、南西壁で33cm立ち上がる。壁溝は確認されていない。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。支柱穴は不明で、P 1：直径20cm、深さ15cm、P 2：直径21cm、深さ30cm、P 3：直径24cm、深さ34cm、P 4：直径19cm、深さ28cm、P 5：直径21cm、P 6：直径26cm、P 7：直径37cmを測る。カマド脇南側に直径93cm、深さ46cmの貯蔵穴が位置している。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層およびカマド内より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。



第16図 第9号住居跡（2）

カマドは両袖が造り付けで、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

【遺物】カマド内より土師器甕片が出土しており、本住居跡廃絶時の遺物と判断される。その他の遺物は、覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第16図1は、土師器甕の胴部片。2は、土師器甕の口縁部片。口縁部は外反し、胴部は球形を呈するものと推定される。推定口径18.3cmを測る。

【時期】遺物から見た本住居の営続期間は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

第10号住居跡（第17図、図版8・12、第8表）

【位置】F・G-Ⅱ・Ⅲグリットに位置する。南東1/3が調査区外にかかり未調査となっている。北側に第13号住居跡が近接して位置している。

【形状】平面形は北西側にカマドを持つ長方形で、北東南西4.2m×南東北西(5.4)mの規模である。長軸の南東-北西方向の軸線を本住居の主軸とすると、N-36°-Eを示す。住居壁は、北東壁で29cm、南西壁で32cm立ち上がる。西側の壁下には壁溝が巡る。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P1：直径27cm、深さ33cm、P2：直径36cm、深さ52cm、P3：直径26cm、深さ14cmを測る。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

カマドは袖部に攪乱が入り、袖部・焚口部・掛口部の構造は不明で、煙道は壁外へ伸びる。

【遺物】遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。土器はいずれも小片で、図示できるものは出土していない。第17図1は、砂岩製の磨石。磨痕が表裏面に、敲打痕が片端部に認められる。

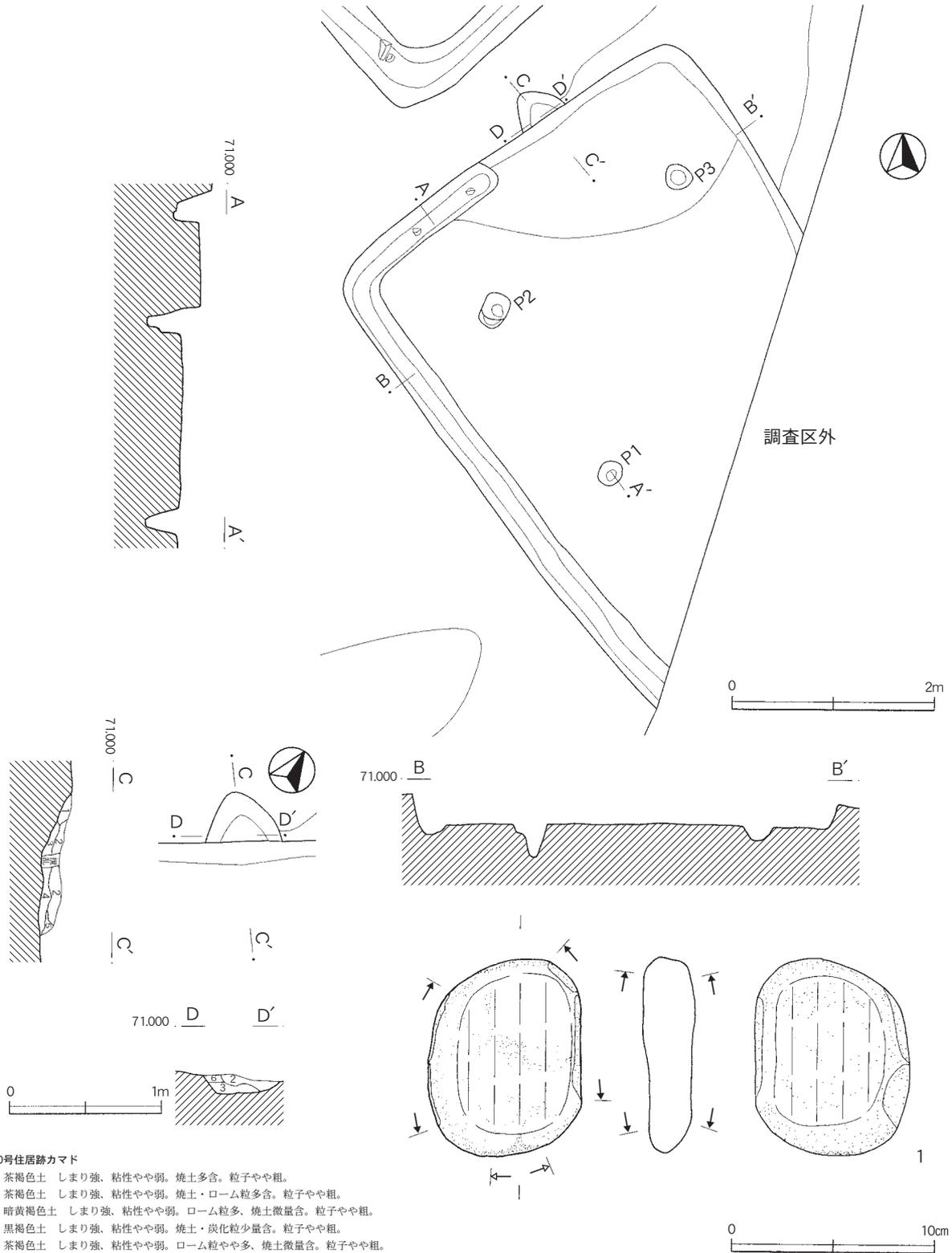
【時期】本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、概ね7～8世紀。

第11号住居跡（第18・19図、図版9・12、第9表）

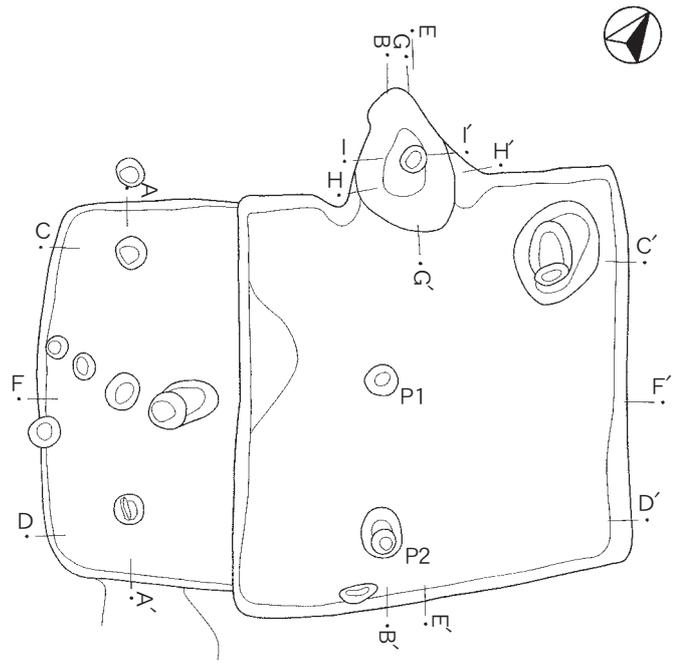
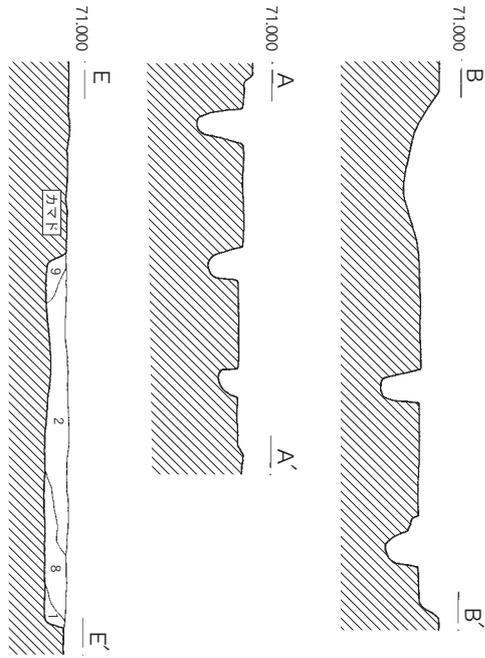
【位置】E・F-Ⅲグリットに位置する。北側に第12号住居跡、南側に第3号掘立柱建物跡が位置している。

【形状】平面形は北西側にカマドを持つ方形で、北東南西3.1m×南東北西3.2mの規模である。南西側に3.1m×1.6m、深さ12cmの方形の掘り込みと重複するが、前後関係は不明である。住居南北西壁のほぼ中央に位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-35°-Eを示す。住居壁は、北東壁で16cm、南西壁で8cm立ち上がる。壁溝は検出されていない。直床で、ほぼ平坦な床面となっている。主柱穴は検出されず、P1：直径26cm、深さ32cm、P2：直径41cm、深さ27cmを測る。カマド脇東側に直径85cm、深さ58cmの貯蔵穴が位置している。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が僅かに出土している。

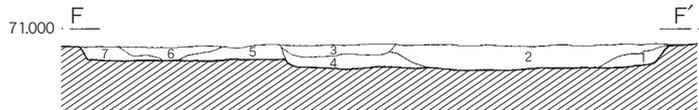
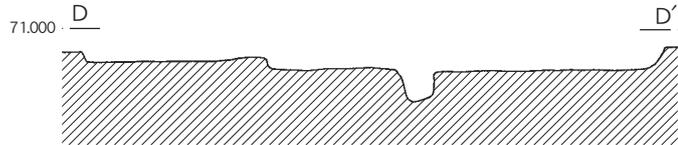
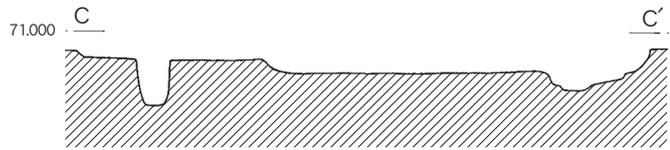


第17図 第10号住居跡



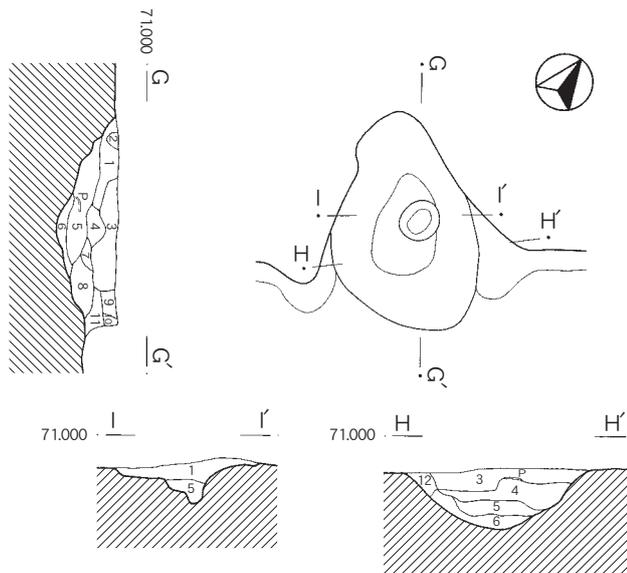
第11号住居跡

1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
2. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、炭化粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
4. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
5. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
6. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多く含。粒子やや粗。
8. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
9. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土微量含。粒子やや粗。



第11号住居跡カマド

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土多、ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや弱い。焼土多含。粒子やや粗。
3. 赤褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土多、ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 赤褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土多含。粒子やや粗。
5. 暗赤褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土多含。粒子やや粗。
6. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土・ローム粒少量含。粒子やや粗。
7. 焼土層
8. 褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土やや多含む。粒子やや粗。
9. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土・ローム粒少量含。粒子やや粗。
10. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土微量、ローム粒少量含。粒子やや粗。
11. 明褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土微量、ローム粒少量含。粒子やや粗。
12. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土微量、ローム粒多含。粒子やや粗。



第18図 第11号住居跡 (1)

カマドは両袖が造り付けて、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

【遺物】遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第19図1～3は、土師器杯の口縁部片。丸底を呈し、口縁部に横ナデ、体部外面を篋削りし、体部と口縁部の境に僅かな稜を有する。4は、口縁部が外反する土師器の長胴甕。推定口径17.9cmを測る。5は、須恵器甕の胴部片。

【時期】本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

第12号住居跡（第20・21図、図版9・12・13、第10表）

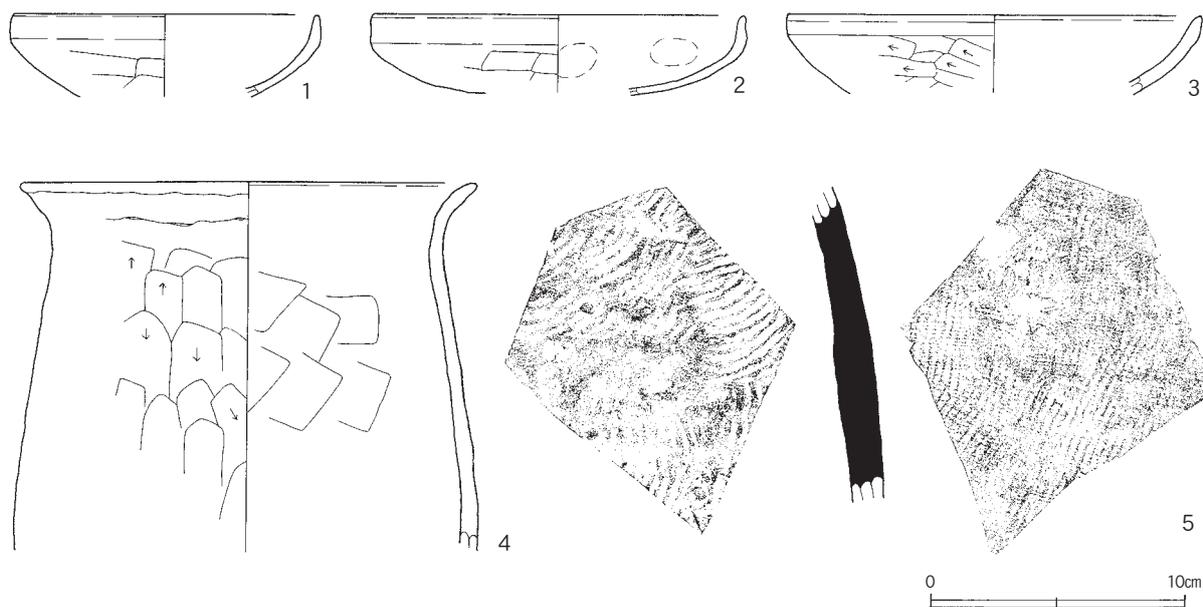
【位置】E・F-IIグリットに位置する。南側に第11号住居跡が近接して位置している。

【形状】平面形は北東側にカマドを持つ長方形で、北東南西4.6m×南東北西3.9mの規模である。住居北東壁の南寄りに位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-63°-Eを示す。住居壁は、北東壁で28cm、南西壁で30cm立ち上がる。壁溝、貯蔵穴は検出されていない。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P1：直径24cm、深さ14cm、P2：直径22cm、深さ9cm、P3：直径19cm、深さ19cm、P4：直径22cm、深さ10cm、P5：直径28cmを測る。

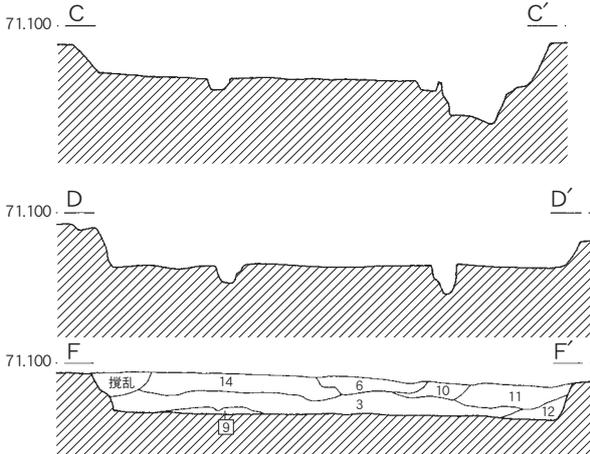
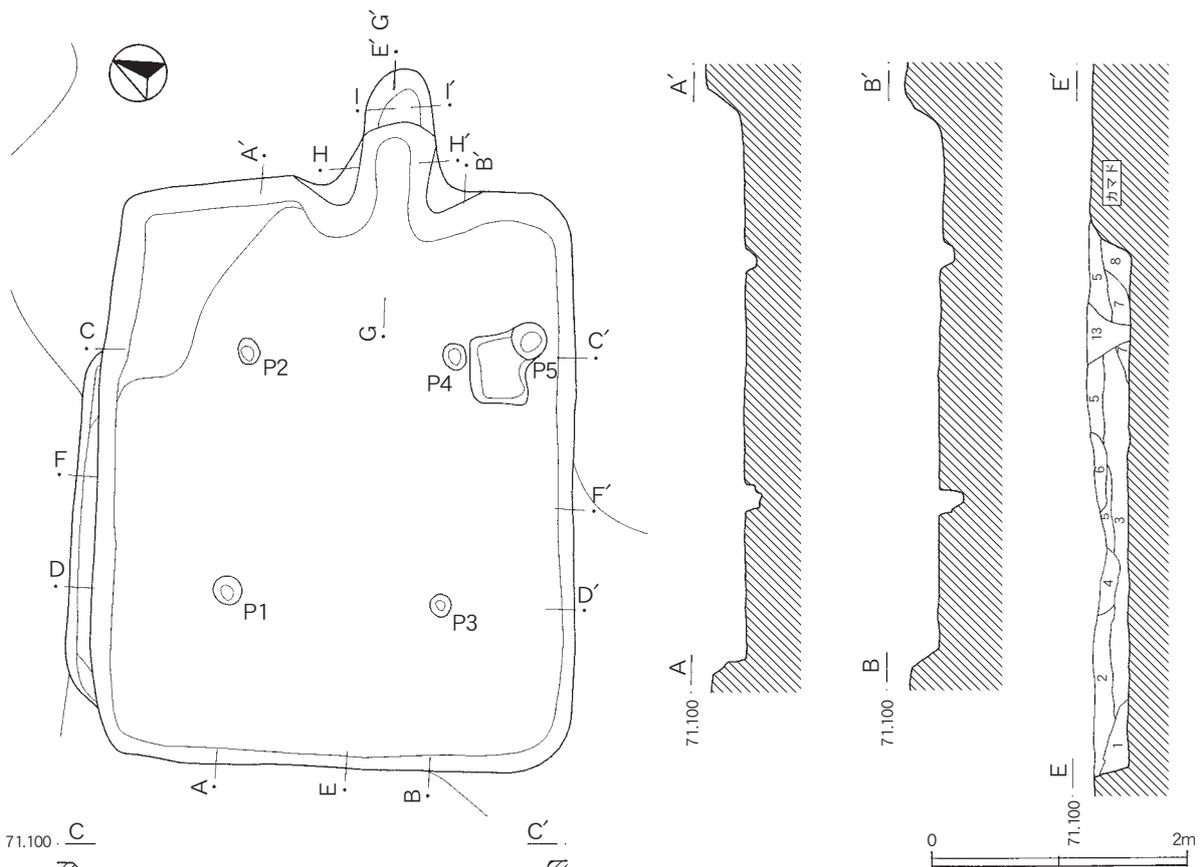
住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が出土している。

カマドは両袖が造り付けて、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

【遺物】遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第21図1～4は、末野産の須恵器杯。1・3・4は、口縁部が屈曲して外反する。4は唯一器形復元できた個体で、推定口径12.4cm、推定器高3.5cm、推定底径5.8cmを測る。5～7は、末野産

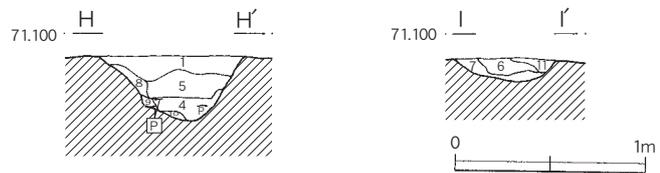
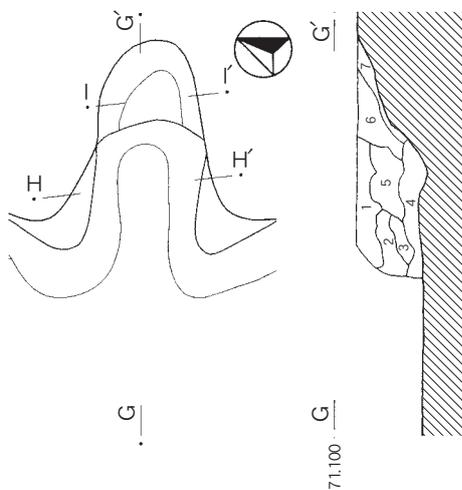


第19図 第11号住居跡（2）



第12号住居跡

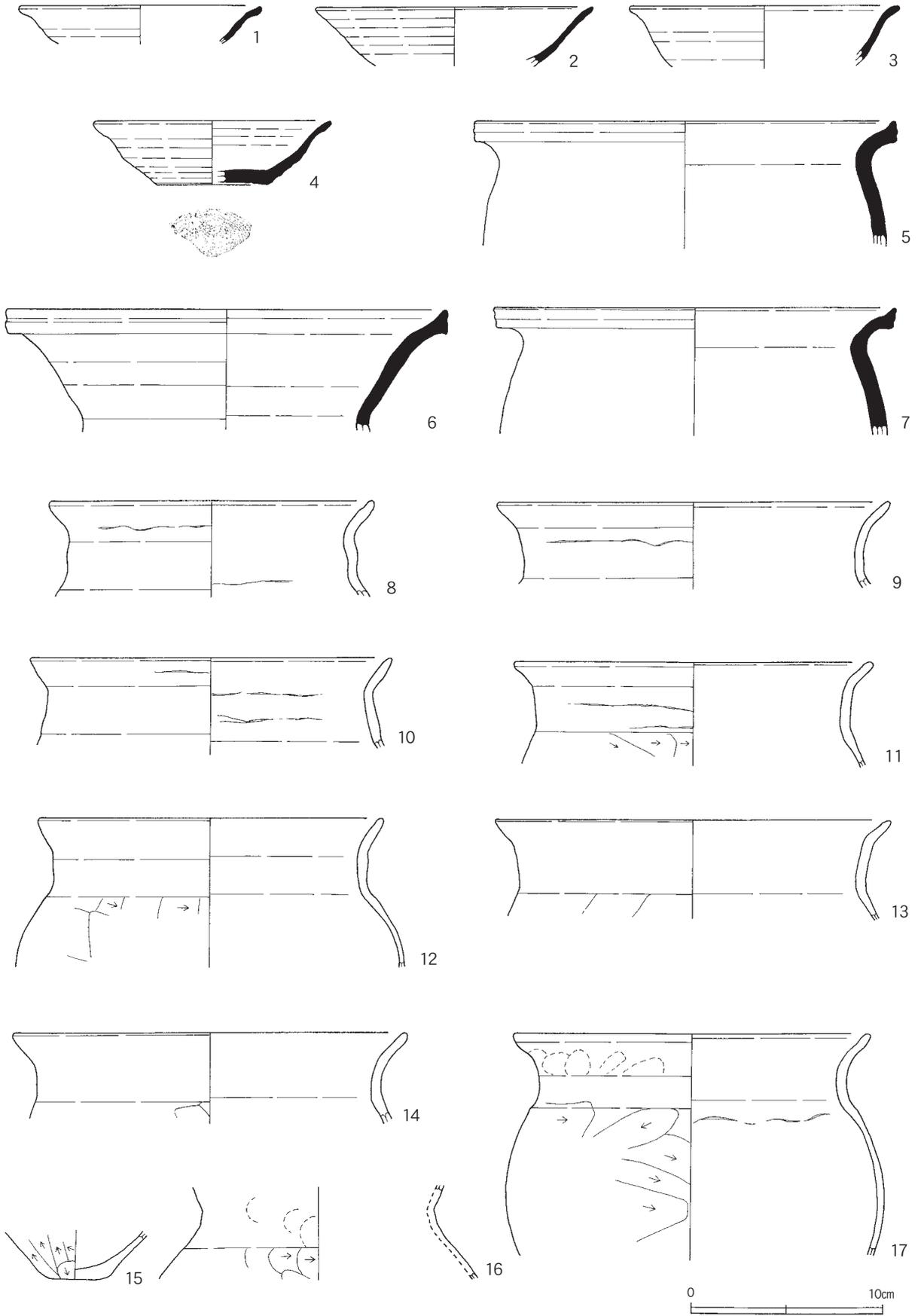
1. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多。焼土・炭化粒微量含。粒子やや粗。
2. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
3. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
6. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、焼土粒・粘土粒微量含。粒子やや粗。
8. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒・炭化粒少量含む。粒子やや粗い。
9. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、焼土粒やや多含。粒子やや粗い。
10. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多く含む。粒子やや粗。
11. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
12. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
13. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
14. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。



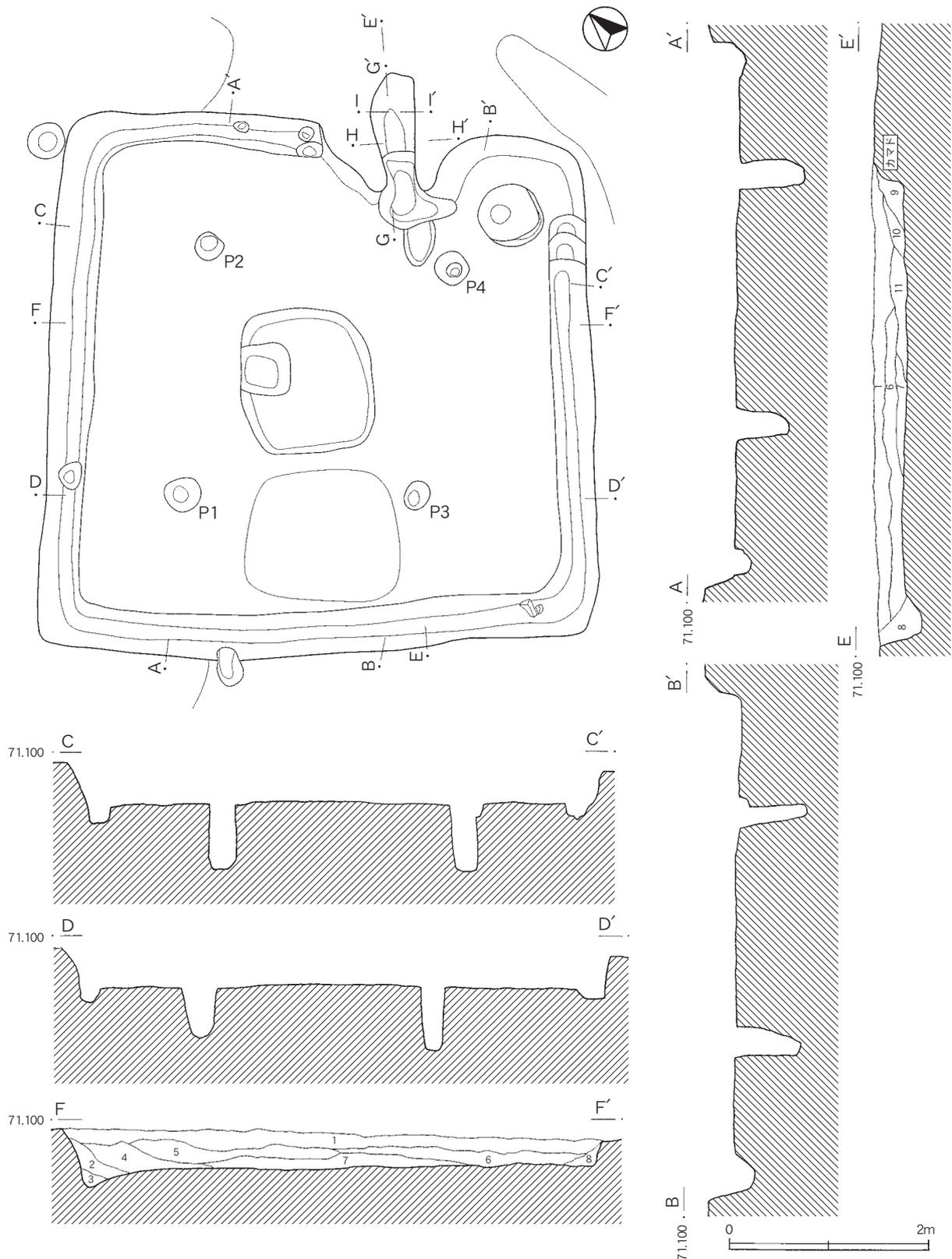
第12号住居跡カマド

1. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土少量、ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量、炭化粒微量含。粒子やや粗。
3. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土少量含。粒子やや粗。
4. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土やや多含。粒子やや粗。
5. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土・ローム粒・粘土粒少量含。粒子やや粗。
6. 灰褐色土 しまり・粘性強。粘土粒多、焼土微量含。粒子やや粗。
7. 茶褐色土 しまり・粘性強。焼土多含。粒子やや粗。
8. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土微量含。粒子やや粗。
9. 焼土層
10. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土やや多含。粒子やや粗。
11. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。焼土少量含。粒子やや粗。

第20図 第12号住居跡 (1)



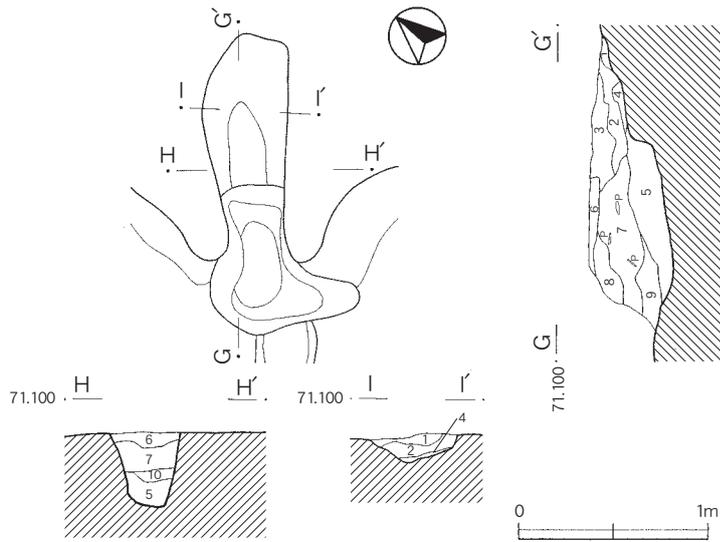
第21图 第12号住居跡 (2)



第13号住居跡

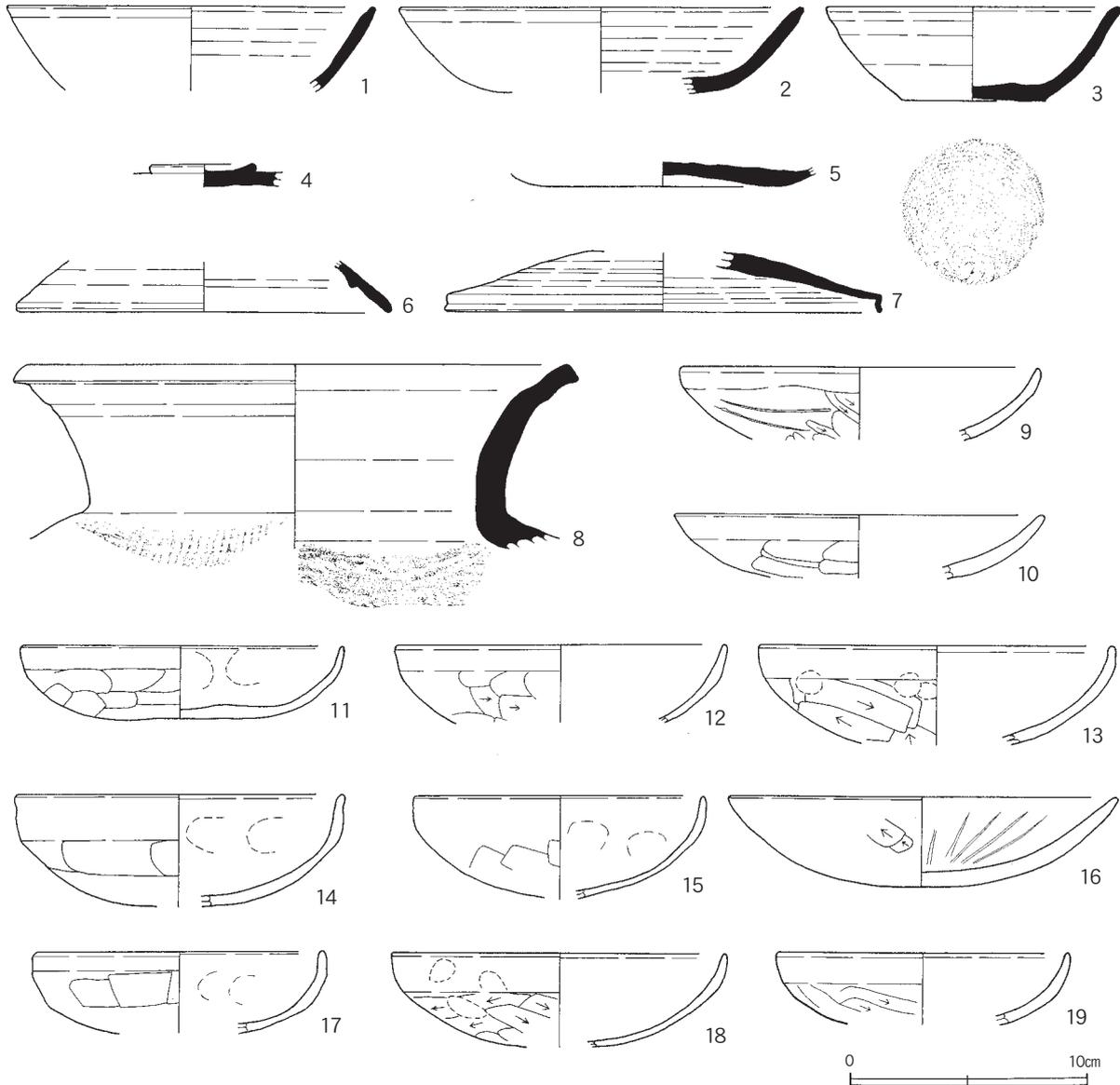
- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。</p> <p>2. 明褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。</p> <p>3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子やや粗。</p> <p>4. 黒褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量、炭化粒微量含む。粒子やや粗。</p> <p>5. 褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量、焼土粒微量含。粒子やや粗。</p> <p>6. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。</p> | <p>7. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土粒やや多、ローム粒少量含。粒子やや粗。</p> <p>8. 黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子やや粗。</p> <p>9. 灰褐色土 しまり・粘性やや弱。粘土粒多、焼土粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。</p> <p>10. 灰褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土・ローム粒微量含。粒子やや粗。</p> <p>11. 褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土・ローム粒微量含。粒子やや粗。</p> |
|---|--|

第22図 第13号住居跡 (1)

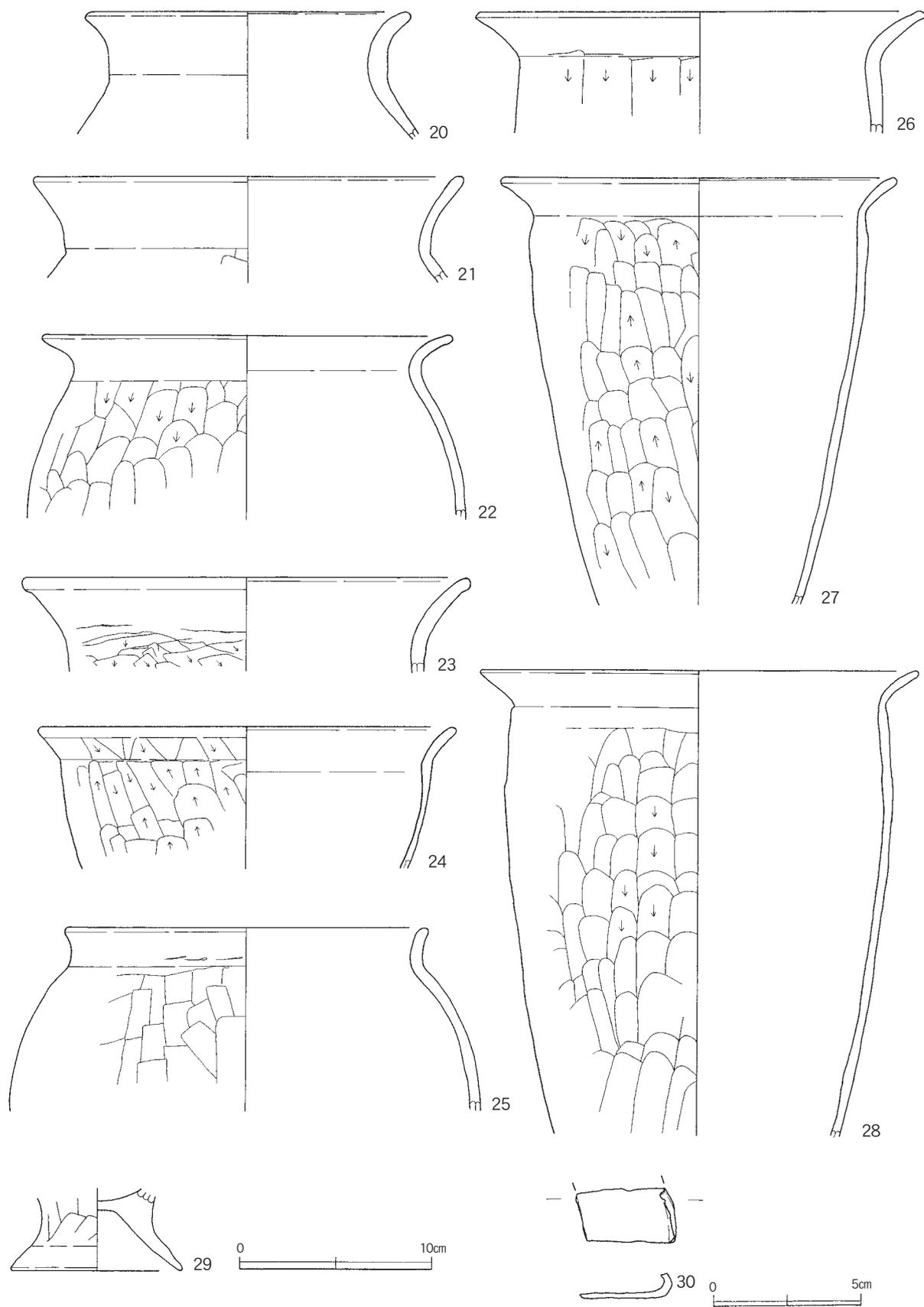


第13号住居跡カマド

1. 黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多。焼土少量含。粒子細。
2. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土粒多含。粒子やや粗。
3. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土粒多、炭化粒微量含。粒子やや粗。
4. 褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土粒少量、炭化粒微量含。粒子やや粗。
5. 褐色土 しまり・粘性やや強。焼土・ローム粒少量含。粒子やや粗。
6. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。焼土粒微量含。粒子やや粗。
7. 明褐色土 しまり・粘性やや弱。粘土粒多。焼土粒少量含。粒子やや粗。
8. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量、焼土粒微量含。粒子やや粗。
9. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多、焼土粒微量含。粒子やや粗。
10. 赤褐色土 しまり・粘性やや弱。焼土粒多含。粒子粗い。



第23図 第13号住居跡（2）



第24图 第13号住居跡 (3)

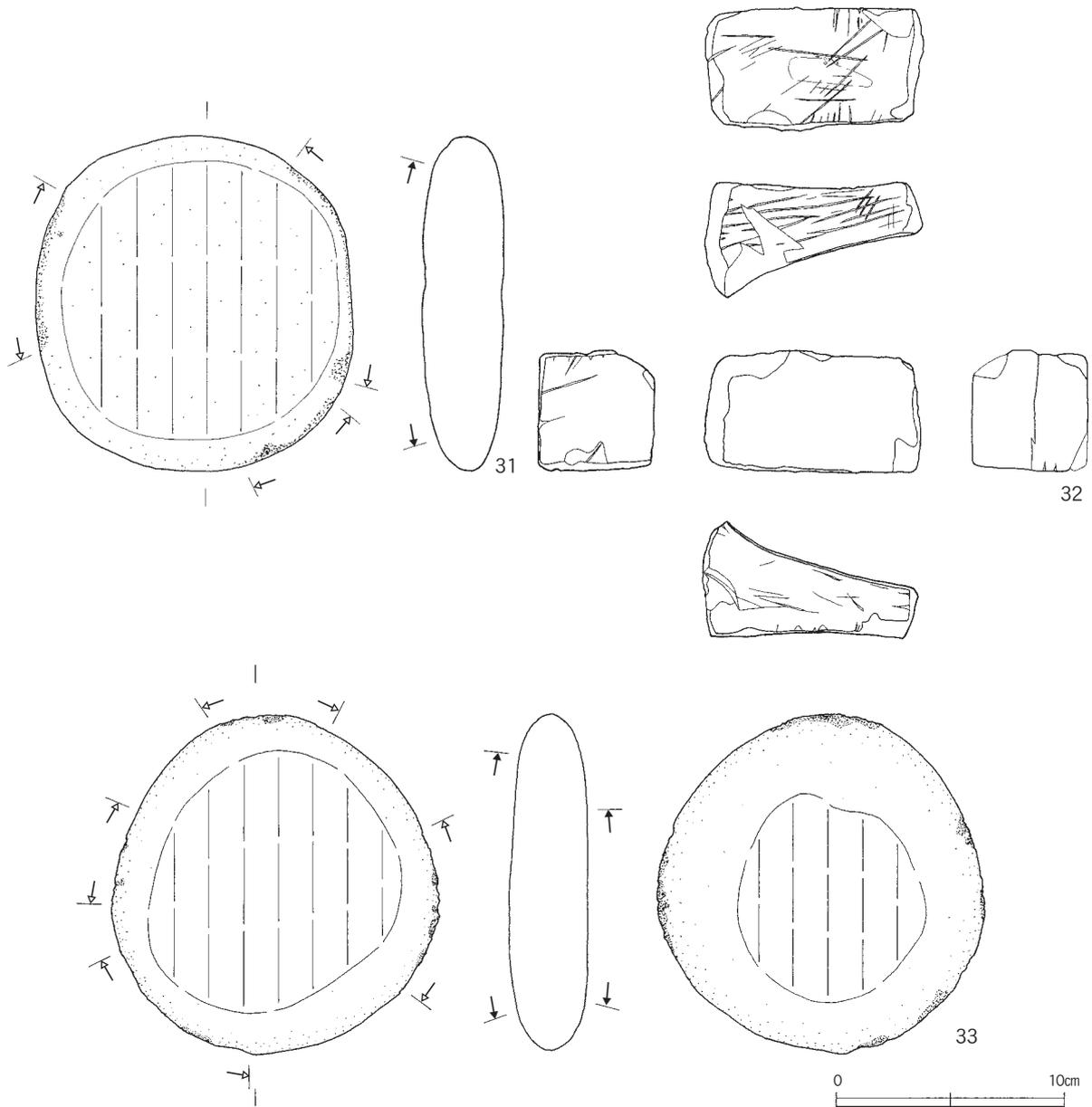
の須恵器甕。5・7は、口縁部が屈曲して外反する。6は口縁部が大きく外反する。外面に灰釉が認められる。推定口径23.0cmを測る。8～14・16・17は、コの字状口縁を呈する土師器甕。15は、土師器甕の底部。底径3.4cmを測る。この他、床面直上より鉄滓が出土している（図版13）。長12cm×幅9cm×厚4cm、重量494g。

【時期】本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、9世紀と考えられる。

第13号住居跡（第22～25図、図版10・13～15、第11表）

【位置】F・G-Ⅱ・Ⅲグリットに位置する。南側に第10号住居跡が近接して位置している。

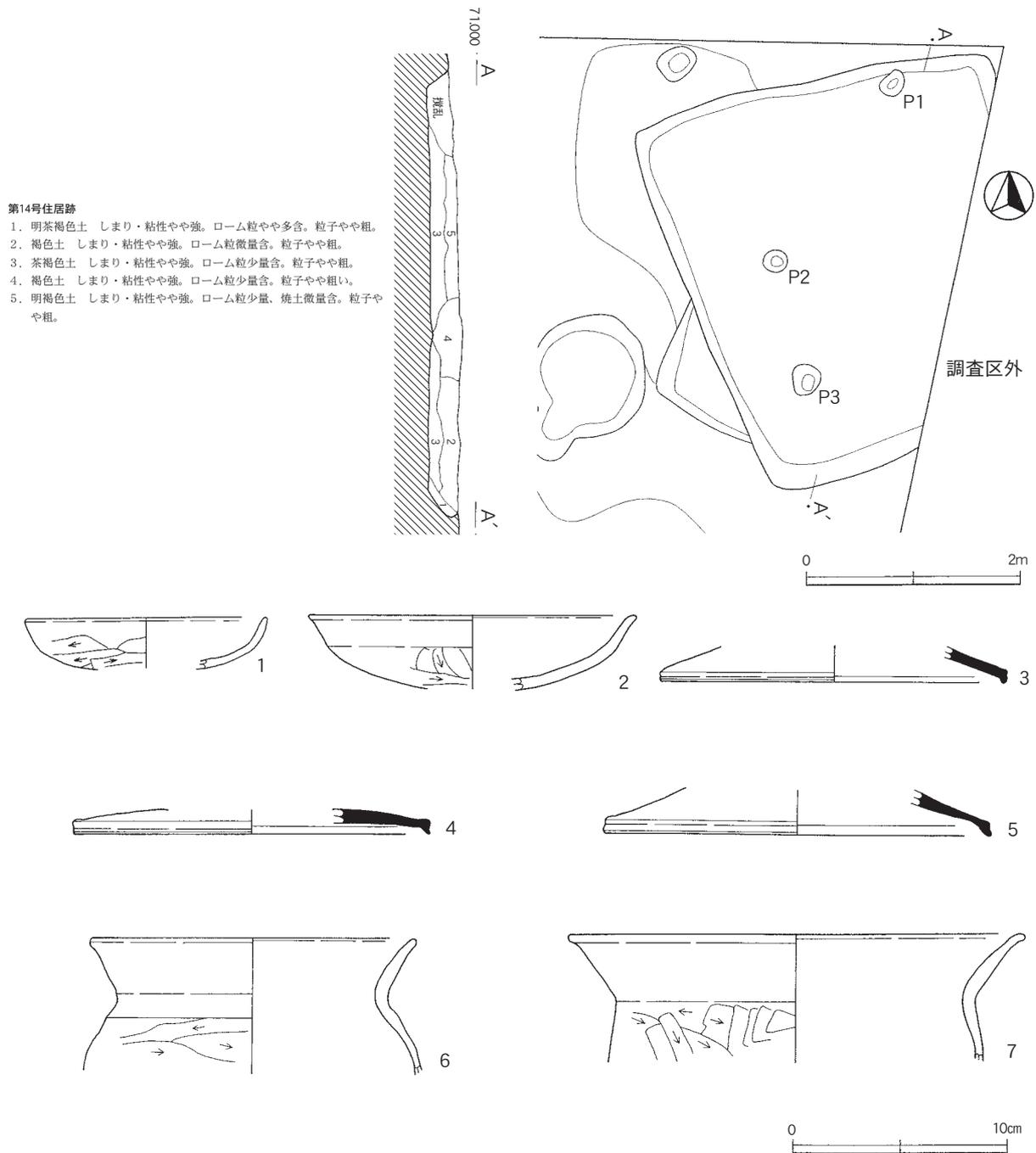
【形状】平面形は北東側にカマドを持つ方形で、北東南西5.6m×南東北西5.6mの規模である。住居北東壁の南寄りに位置するカマドを通る軸線が本住居の主軸となり、N-54°-Eを示す。住居壁は、



第25図 第13号住居跡（4）

北東壁で34cm、南西壁で30cm立ち上がる。壁下には、カマド部以外に壁溝が巡る。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。柱穴は、P 1：直径36cm、深さ53cm、P 2：直径28cm、深さ64cm、P 3：直径31cm、深さ67cm、P 4：直径33cm、深さ70cmを測る。カマド脇南側に直径73cm、深さ43cmの貯蔵穴が位置している。住居中央に長径145cm、短径135cm、深さ23cmの方形の土壇が検出されている。本住居跡に伴うものかは不明であるが、主軸方向はほぼ一致する。

住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土中より、須恵器・土師器片が、床面直上より第23図8の須恵器甕の口縁部が出土している。



第26図 第14号住居跡

カマドは両袖が造り付けで、焚口部が住居内に、掛口部が壁ライン上に位置し、煙道は壁外へ伸びる構造をとる。

【遺物】 第23図1～3は須恵器坏の口縁部片。1・2は、体部と口縁部の境に僅かな稜を有する。3は、覆土上層より出土しており、9世紀代に属し時期が異なる。口径12.4cm、器高4.0cm、底径6.1cmを測る。4・6・7は須恵器の蓋。5は須恵器坏の底部。底径10.0cmを測る。8は、床面直上より出土した須恵器甕の口縁部。口径23.8cmを測る。9～19は、口縁部に横ナデ、体部外面を篋削りする丸底を呈する土師器の坏。6は、内面に暗文が施されている。第24図20～28は土師器の甕。24・26～28は、口縁部が外反し、胴部の膨らみの弱い截頭砲弾形を呈する。20～22、25は、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。29は、土師器台付甕の台部。30は、板状の鉄製品。鎌の木柄に付ける部分と推測される。第25図31・33は、扁平な円礫の扁平な面を磨面として使用した石器。31は閃緑岩製、33は砂岩製。32は、砥石。4面に線状痕が観察される。

【時期】 遺物から見た本住居の営続期間は、8世紀前半と考えられる。

第14号住居跡（第26図、図版10・15、第12表）

【位置】 G-Iグリッドに位置する。東側1/3が調査区外にかかり未調査となっている。西側に第5号掘立柱建物跡が位置している。

【形状】 平面形は方形で、カマドは調査区外に位置するものと推測される。南北3.4m×東西3.4mの規模である。長軸の東西方向の軸線を本住居の主軸とすると、N-76°-Eを示す。住居壁は、北東壁で21cm、南西壁で28cm立ち上がる。壁溝、貯蔵穴は検出されていない。直床で、ほぼ平坦な床面となっており、各隅に柱穴が配される。支柱穴は確認されず、P1：直径26cm、P2：直径23cm、P3：直径29cmを測る。

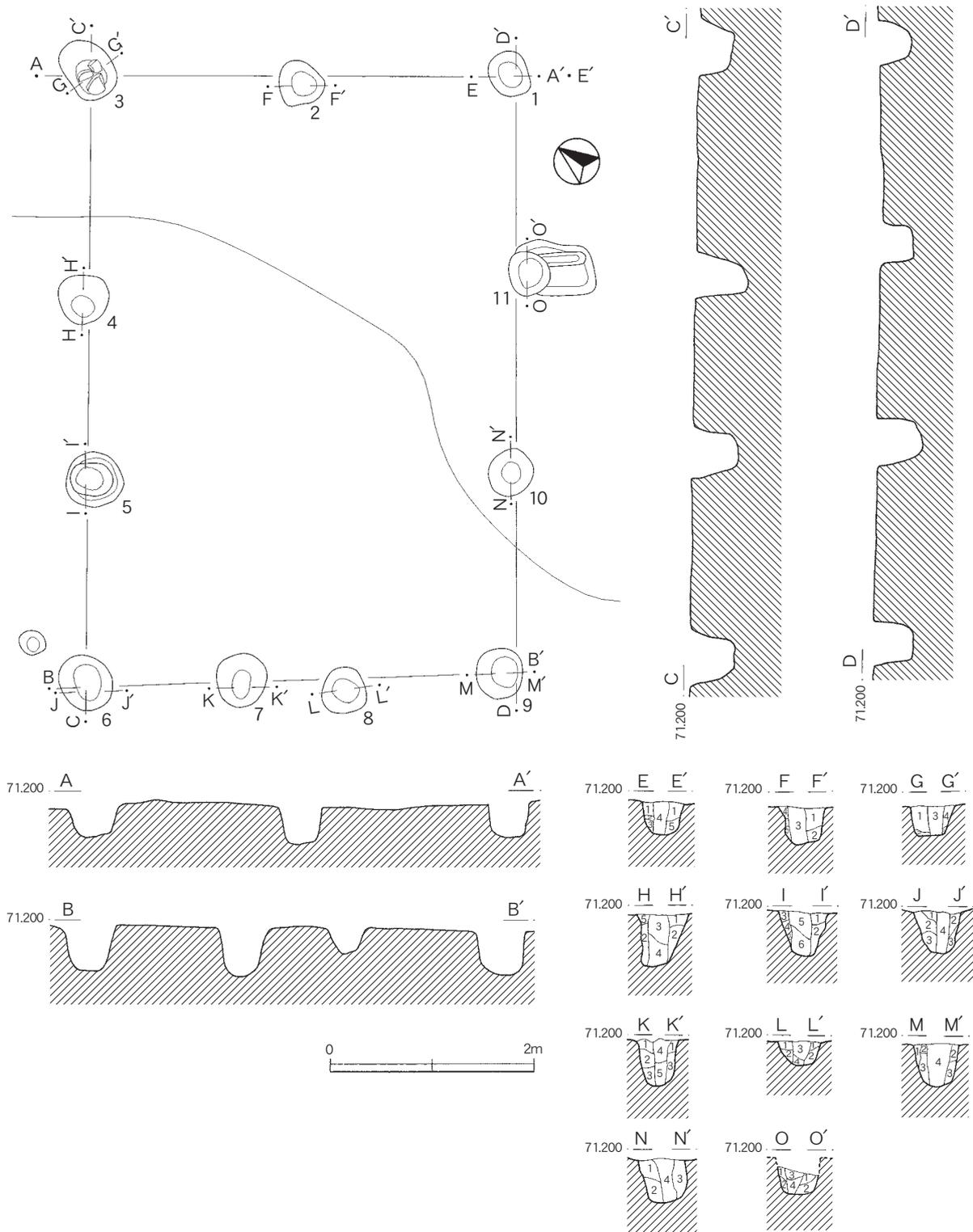
住居覆土は周囲からの流れ込みを示す自然な堆積を示しており、遺物をほとんど含まず、住居廃絶後の自然な埋没を示している。遺物は覆土下層より、須恵器・土師器片が出土している。

【遺物】 遺物はいずれも覆土下層より出土しており、本住居跡廃絶後に流入または廃棄されたものと判断される。第26図1・2は、土師器の坏。丸底を呈し、口縁部に横ナデ、体部外面を篋削りしている。3～5は、須恵器の蓋。6・7は土師器甕の口縁部片。口縁部が外反し、6の胴部は球状を呈し、7は、膨らみの弱い截頭砲弾形を呈するものと推測される。

【時期】 本住居跡の帰属時期を直接示す遺物の出土は無い。覆土下層から出土した遺物から見た本住居の営続期間は、8世紀初頭と考えられる。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、5棟が調査区の北東から南西方向の住居跡の内側に分布している。主軸が南東—北西方向の第2～5号掘立柱建物跡が調査区中央から東側に分布し、約90° 主軸方向を変えた北東—南西方向の第1号掘立柱建物跡が調査区西側で確認されている。



第27図 第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

第1号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。

第2号ピット

1. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。

第3号ピット

1. 暗褐色土 しまり・粘性やや強い。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第4号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

第5号ピット

1. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
6. 黒色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含む。粒子やや粗。

第6号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第7号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5. 黒色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第8号ピット

1. 暗褐色 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
4. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

第9号ピット

1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
2. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第10号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第11号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 黒色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第1号掘立柱建物跡（第27図、図版11）

〔位置〕 B・C-Ⅳ・Ⅴグリットに位置する。東側に第6号住居跡が位置する。

〔規模〕 北東-南西棟、3×2間であるが、南西側の梁行が2間ではなく3間と変則となっている。5.8×4.0m、柱間距離は、桁行2.2~1.9m、梁行約2.0mを測る。床面積は約23.2㎡。主軸は、N-53°-Eの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は、略規模の等しい円形で、直径は44~62cm、深さ34~52cmを測る。各ピットには柱痕が確認できることから、建替えはなされていないと判断される。

〔遺物〕 覆土中より土師器片が少量出土しているが、図示するには至らなかった。

〔時期〕 覆土および覆土中の遺物より判断して、7~9世紀と推測される。

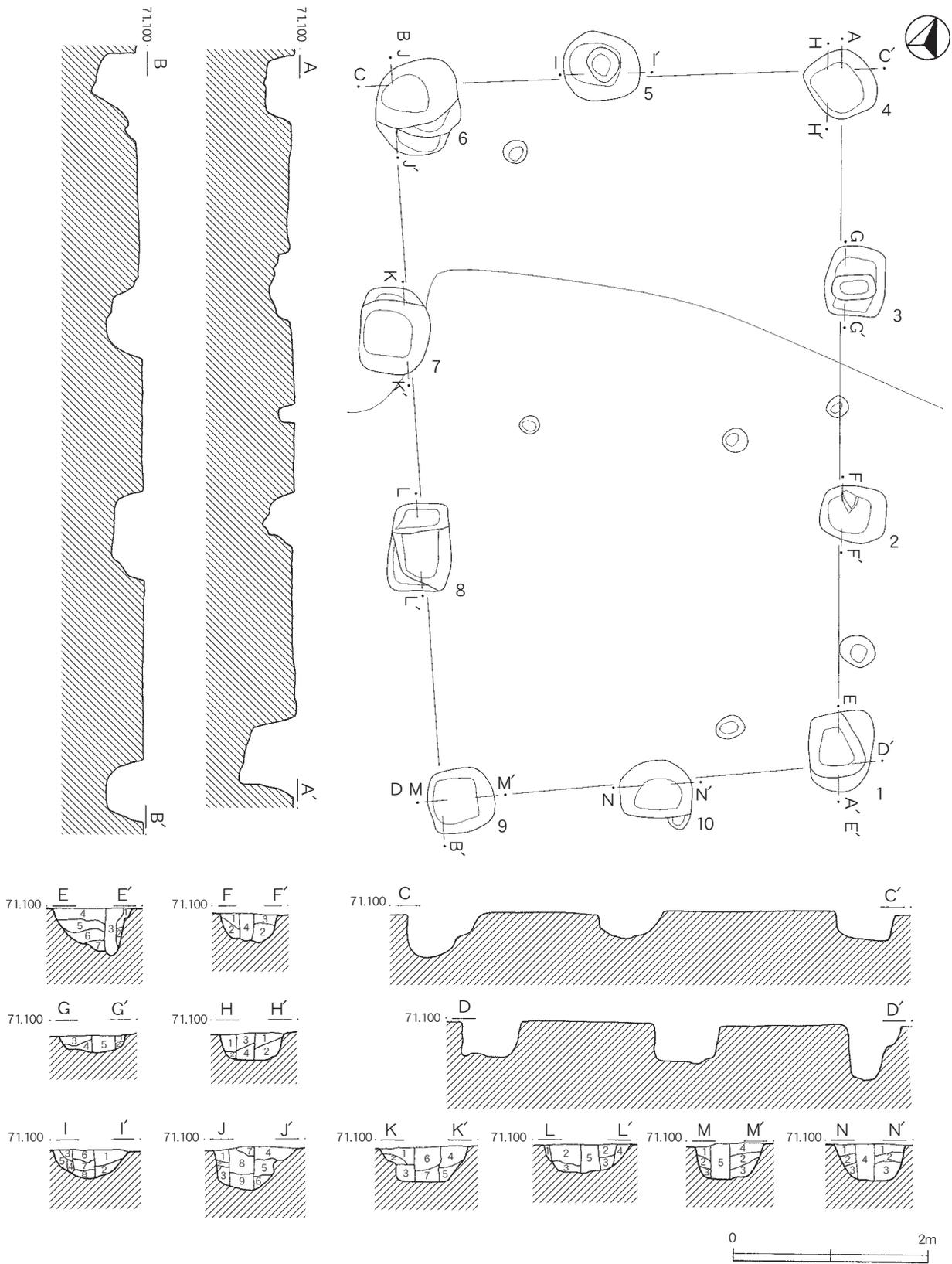
第2号掘立柱建物跡（第28図、図版11）

〔位置〕 C・D-Ⅳ・Ⅴグリットに位置する。西側に第6号住居跡が位置する。

〔規模〕 北西-南東棟、3×2間で、全柱穴が揃う。7.2×4.2m、柱間距離は、桁行2.2~2.4m、梁行1.8~2.4mを測る。床面積は約30.2㎡。主軸は、N-28°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は、略規模の等しい隅丸方形で、長径は58~82cm、深さ18~49cmを測る。各ピットには柱痕が確認できることから、建替えはなされていないと判断される。

〔遺物〕 覆土中より土師器片が少量出土しているが、図示するには至らなかった。

〔時期〕 覆土および覆土中の遺物より判断して、7~9世紀と推測される。



第28図 第2号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡

第1号ピット

1. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
2. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
6. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
7. 黒色土 しまり・粘性やや強。粒子粗。

第2号ピット

1. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第3号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
3. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第4号ピット

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
2. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
3. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
4. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子粗。

第5号ピット

1. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
4. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
5. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
6. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
8. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

第6号ピット

1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
4. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
6. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
7. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
8. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
9. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。

第7号ピット

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
4. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
5. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
6. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。

第8号ピット

1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
2. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
5. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。

第9号ピット

1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 茶褐色土 しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
4. 褐色土 しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5. 暗褐色土 しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

第10号ピット

1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
3. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。

第3号掘立柱建物跡（第29図、図版11・15、第13表）

〔位置〕 F・G-Ⅲ・Ⅳグリットに位置する。北側に第11号住居跡が位置する。

〔規模〕 北西-南東棟、3×3間で、全柱穴が揃う。7.2×5.0m、柱間距離は、桁行2.4m、梁行1.5～1.8mを測る。床面積は約36㎡。主軸は、N-30°-Eの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は、略規模の等しい円形で、直径は30～80cm、深さ28～71cmを測る。

〔遺物〕 ピット3の覆土中より、第29図1土師器鉢の口縁部が1点出土している。

〔時期〕 覆土中より出土した遺物より判断して、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

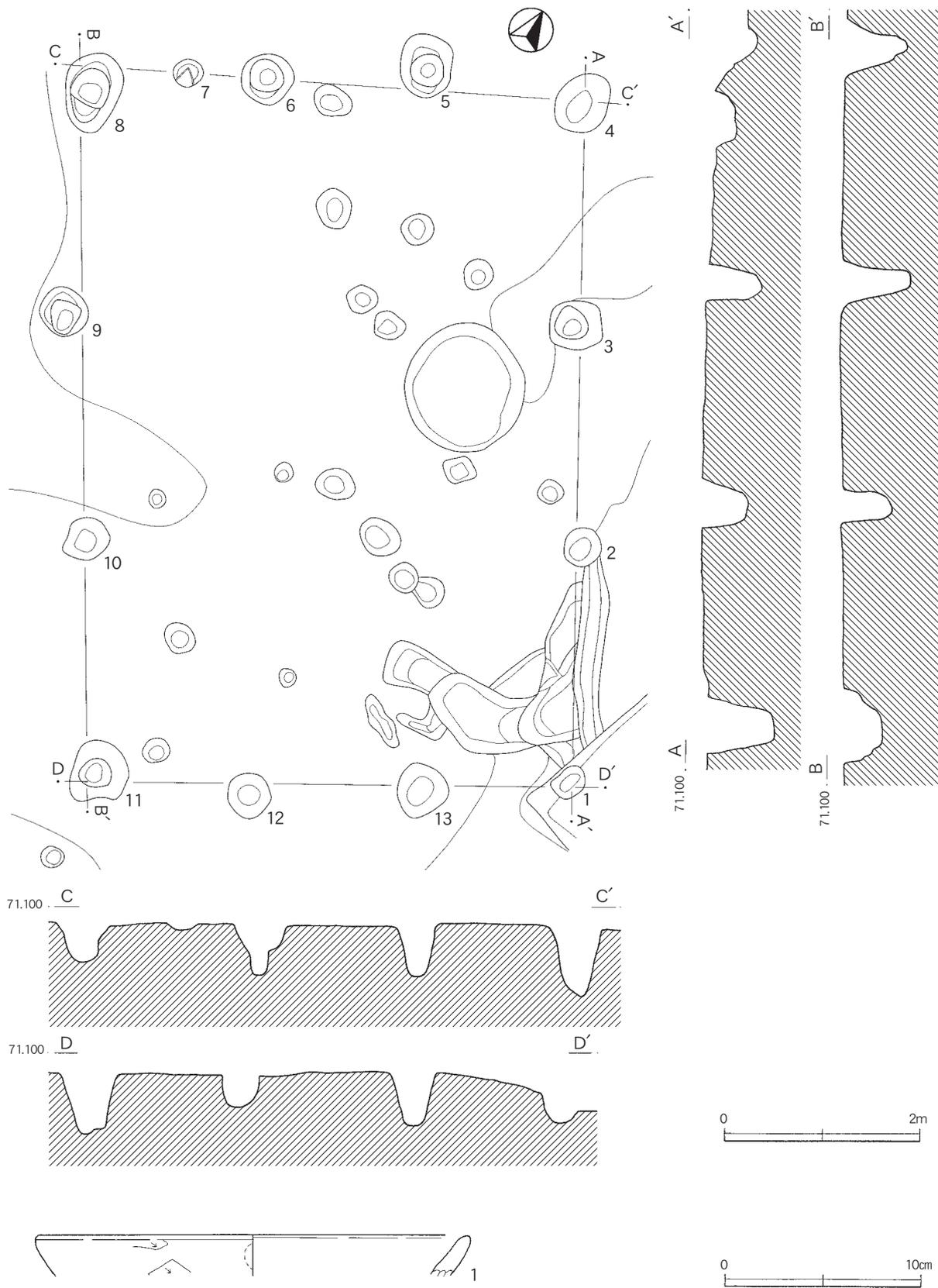
第4号掘立柱建物跡（第30図、図版11）

〔位置〕 E・F-Vグリットに位置する。南西側に第7号住居跡が位置している。

〔規模〕 北西-南東棟、3×2間で、一部柱穴が確認されていない。南西隅の柱穴が建替えられている。南東梁行中央の柱穴が確認されていない。5.4～5.9×3.6m～4.0m。柱間距離は、桁行1.6～1.8m、梁行2.0mを測る。南東側の梁行が短い。床面積は約22.4㎡。主軸は、N-30°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は、略規模の等しい円形で、直径は31～66cm、深さ27～55cmを測る。

〔遺物〕 覆土中より土師器片が少量出土しているが、図示するには至らなかった。

〔時期〕 覆土および覆土中の遺物より判断して、7～9世紀と推測される。



第29图 第3号掘立柱建物跡

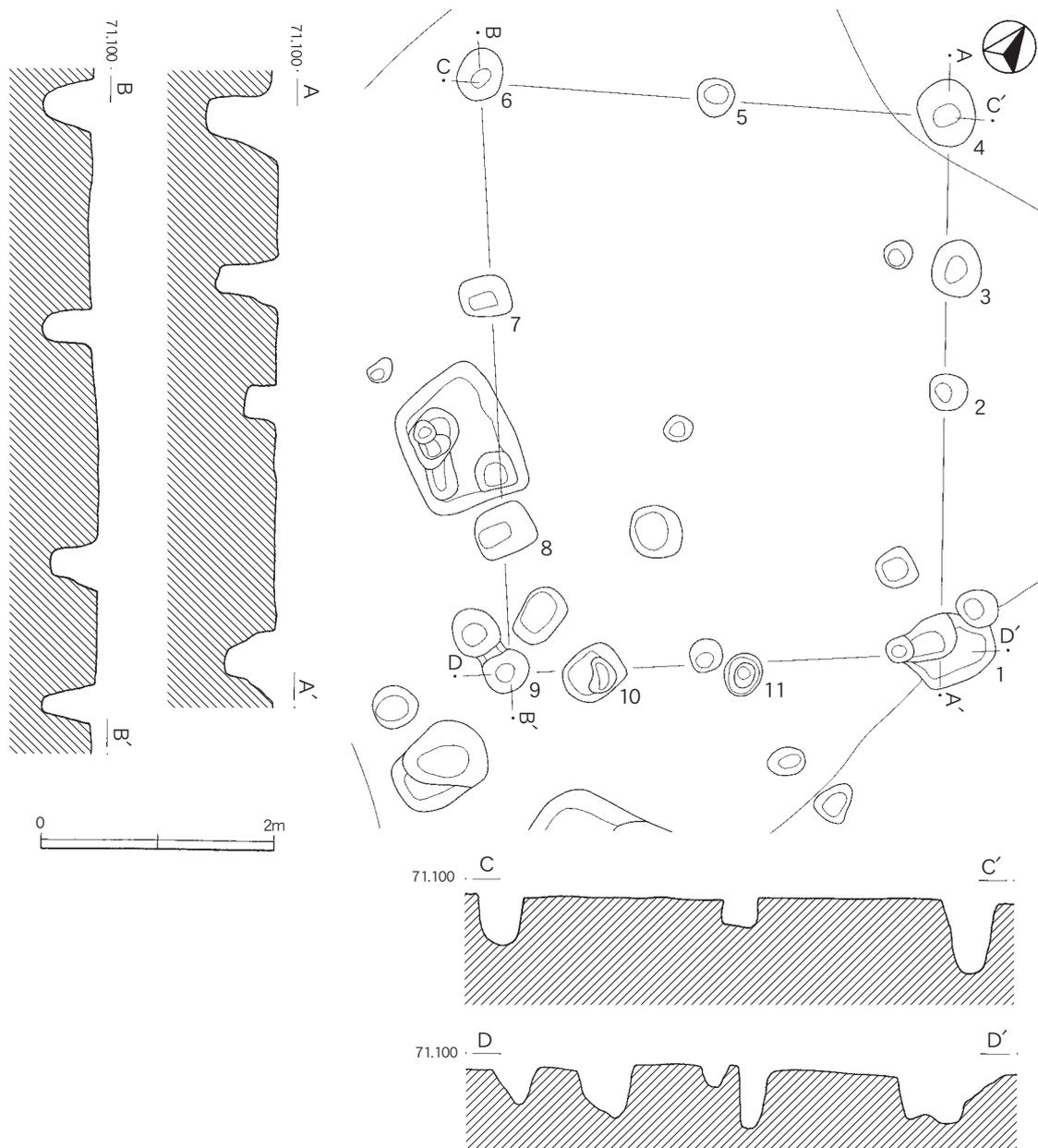
第5号掘立柱建物跡 (第31図、図版15、第13表)

[位置] F・G-I・IIグリットに位置する。東側に第14号住居跡が位置している。

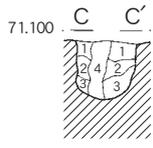
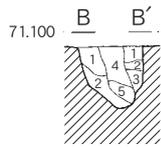
[規模] 北西-南東棟、3×2間で、北側が調査区外にかかり未調査となっている。(6.0)×3.8m。柱間距離は、桁行1.8~2.3m、梁行1.9mを測る。主軸は、N-27°-Wの方位を持つ側柱建物である。柱穴の掘方は、略規模の等しい円形で、直径は42~57cm、深さ39~54cmを測る。各ピットには柱痕が確認できることから、建替えはなされていないと判断される。

[遺物] ピット1の覆土中より、第31図1の土師器坏の片が、ピット3の覆土中より、2の土師器甑の底部片が出土している。

[時期] 覆土中より出土した遺物より判断して、7世紀末~8世紀初頭と考えられる。



第30図 第4号掘立柱建物跡



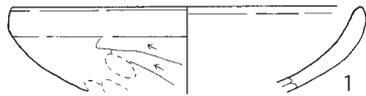
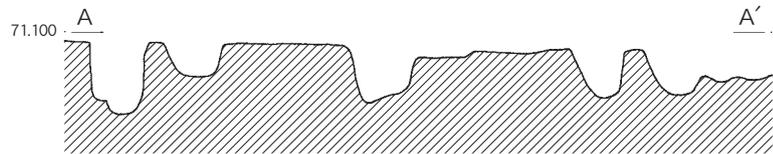
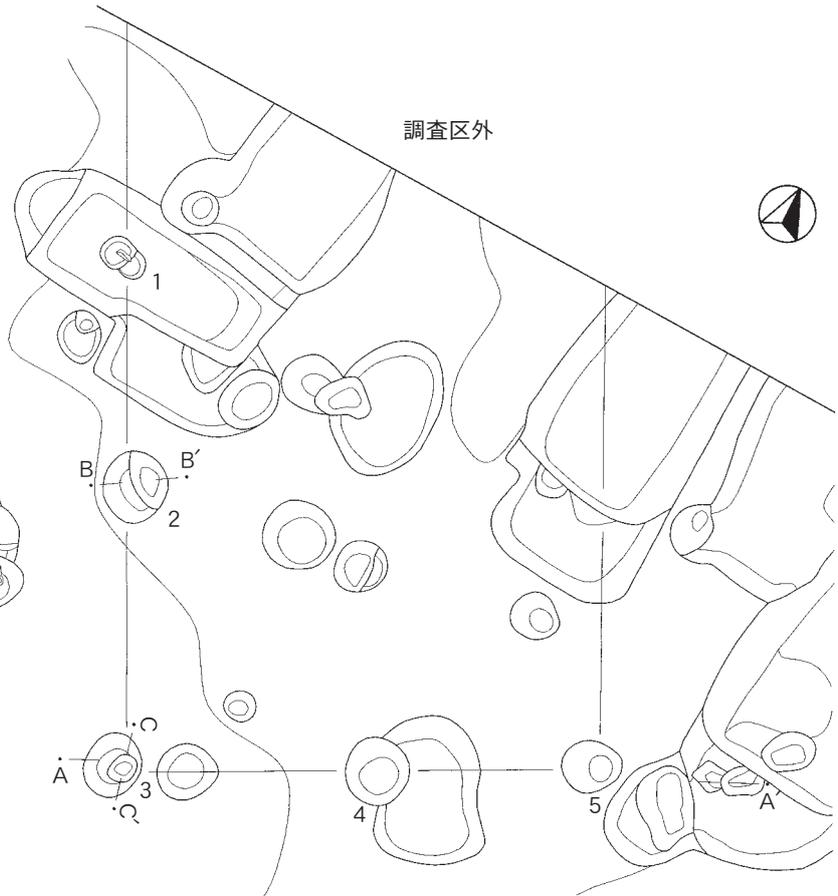
第5号掘立柱建物跡

第2号ピット

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含む。粒子やや粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4. 褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒やや多含。粒子やや粗。

第3号ピット

1. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
3. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
4. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。



第31図 第5号掘立柱建物跡

第3節 遺構外出土遺物

1. 縄文土器 (第32図1～7、図版15)

遺構外からは、縄文時代前期と中期に属する土器が少量出土している。

1～4は同一個体。1～3は口縁部片で、口唇部上に棒状貼付文が貼付されている。地紋は、半裁竹管による平行沈線が横位に施文されている。諸磯C式土器。

5は、キャリパー形を呈する口縁部片。太い沈線で口唇部下に1条の沈線を巡らせ、口縁下に波状沈線を巡らせている。地紋は、櫛歯状工具による条線が縦位に施されている。連弧文土器。

6は、口縁部文様帯を隆帯による楕円区画文で構成し、隆帯脇を太い沈線で修形する。楕円区画内には単節LR縄文が充填されている。加曾利E3式土器。

7は、胴部破片。太い隆帯上に円形刺突を加え、隆帯下には縦位の沈線が施文されている。加曾利E3式土器に伴う胴部隆帯文系土器。

2. 石器 (第32図8～14・図版15)

遺構外からは、7点の石器が出土している。

8は、凸基有茎石鏃。全体がかなり風化、磨耗し平らになっている。そのため側縁の成形加工の仔細は不明だが、基部は大きく4枚の剥離面から形成されている。石質はフォルンフェルス。9は、先端部と基部の一部を欠損する凸基有茎石鏃。薄い素材剥片を使用し、片側の側辺に連続的な微小剥離痕が認められる。基部の成形加工の一部は、平たい剥離面が並行し、直線的な側辺形を呈しており、典型的な押圧剥離によるものと考えられる。石質は黒曜石。

10は、2次加工のある剥片。片面に自然面の残る礫片が素材で、石核整形後に剥離された剥片ではない。周囲に細かい剥離を背面と腹面から不連続にもつ。石質は泥岩。

11は、礫器。刃部は、片面からの比較的大きな数枚の剥離面によって作られている。石質は泥岩。

12は、分銅形の打製石斧。腹面の主要剥離面に絵柄や使用による磨痕、磨耗痕が認められる。左右の抉入部の加工方法は明確ではないが、ハンマーを鋭い縁辺に垂直にあてて加撃痕が一部に認められる。石質は砂岩。

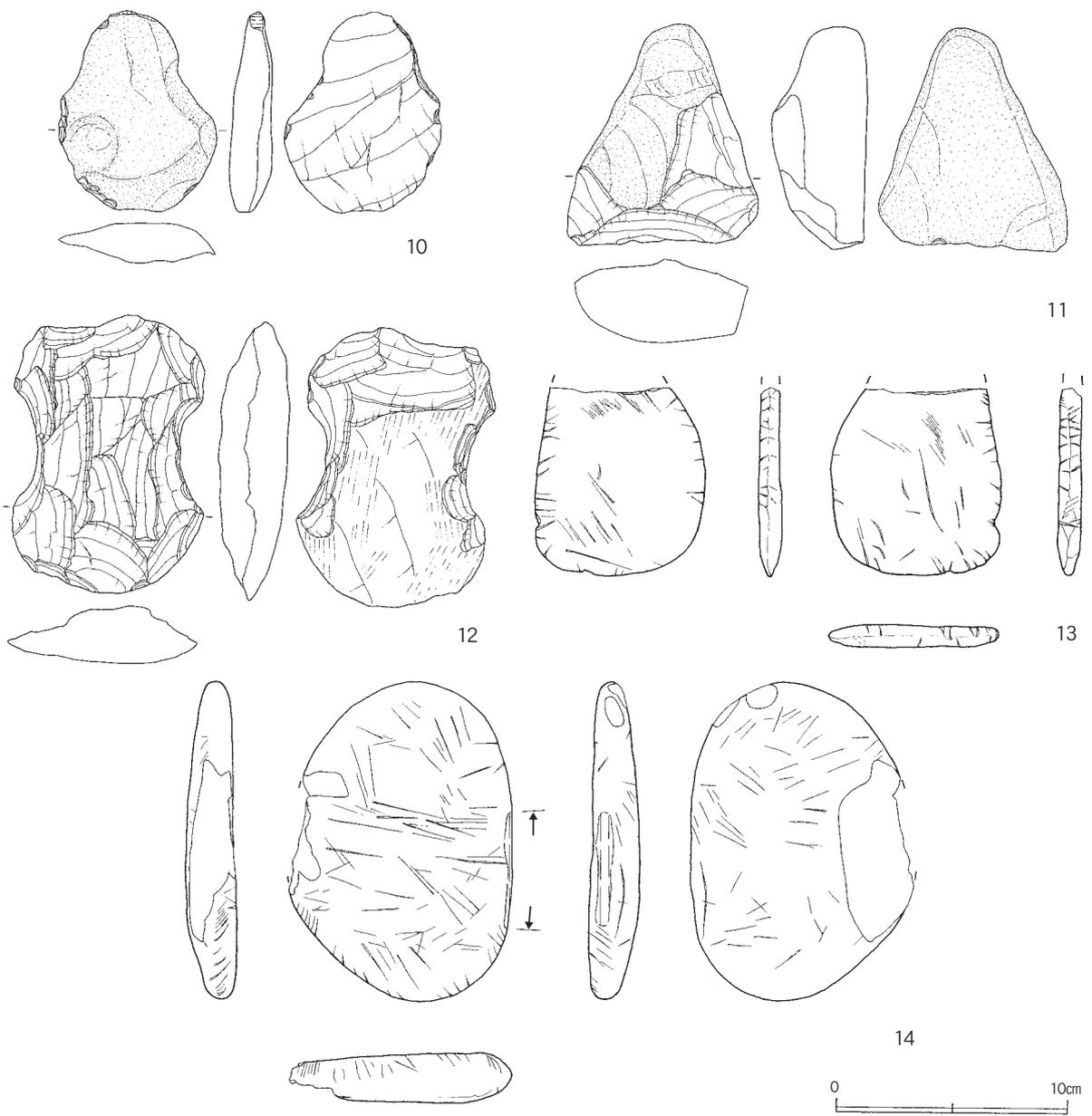
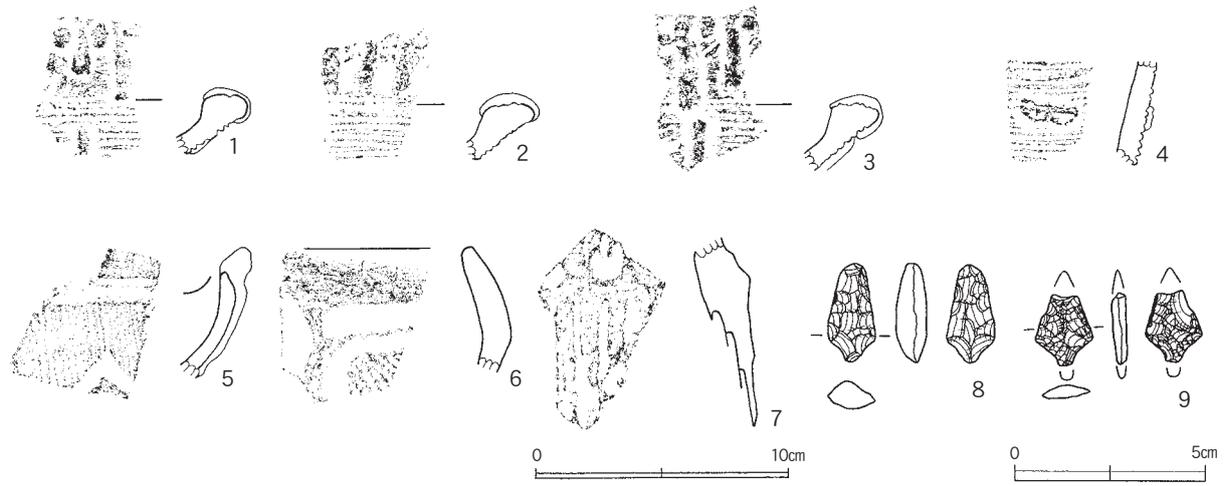
13は、1辺を欠損する盤状の砥石。全面が程良く磨られており、短い擦痕状の痕跡が残る。石質は砂岩。14は、一部を欠損する盤状の砥石。片面が良く磨られ、平らになっており、全面に短い擦痕状の痕跡が残る。一部被熱により赤化し、煤けている。石質は砂岩。

3. 土師器 (第33図15・図版15)

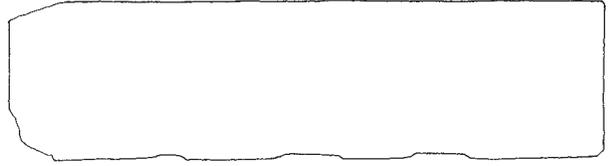
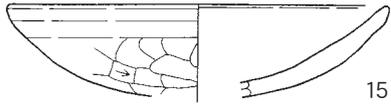
15は丸底の土師器杯。推定口径15.0cm、推定器高3.6cmを測る。

4. その他 (第33図16、17・図版15)

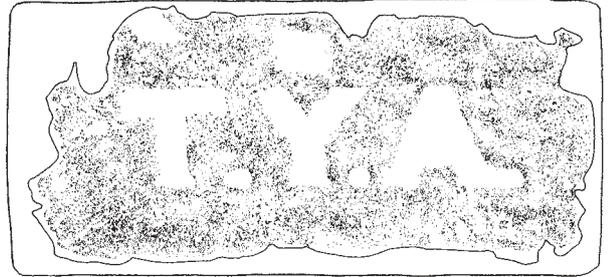
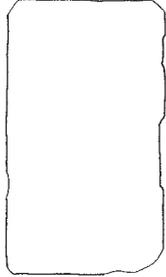
16は、青銅製の煙管の吸口部。1枚の銅板を巻いて製作されたもので、小口には補強帯が無いことから、18世紀以降に製作されたものと判断される。17は、レンガ。T. Y. A. と刻印される。



第32図 遺構外出土遺物(1)



16



第33図 遺構外出土遺物（2）

第Ⅳ章 調査のまとめ

今回の第2次調査では、竪穴住居跡11軒と掘立柱建物跡5棟が確認された。判明した各遺構の帰属時期は、第1期：7世紀末～8世紀初頭（第4・5・8・9・11・14号住居跡、第3・5号掘立柱建物跡）、第Ⅱ期8世紀前半（第13号住居跡）、9世紀前半（第6・12号住居跡）の概ね3期に分けられる。第7・10号住居、第1・2・4号掘立柱建物跡は、第Ⅰ期～Ⅱ期に位置づけられる。第2次調査区から150m程離れている第1次調査区では、第Ⅰ期の竪穴住居跡3軒が検出されており、本遺跡の主体となる時期は第Ⅰ期と考えられる。

第Ⅰ～Ⅱ期となる遺構の配置を見ると、竪穴住居跡は調査区内でL字形の配置をとる。北東にカマドを配置する第4・7・9・13号住居跡は、主軸方向N-Eへ 52° ～ 60° でほぼ一致する。唯一南西方向にカマドを配置する第5号住居跡はN-Wへ 124° であり主軸方向は一致する。この第5号住居跡は、北東方向に80cmの距離で第4号住居が位置しており、同時存在に疑問が残るが、主軸方向が一致することから、カマドの構築の際に北東方向に位置する第4号住居跡に配慮し南西方向に配置したものと推測される。北西にカマドを配置する第10・11号住居跡は、主軸方向がN-Eへ 35° ～ 36° で一致し、第4・7・9・13号住居跡と主軸方向がほぼ直行する。

掘立柱建物跡は、調査区内でL字形の配置をとる。第3～5号掘立柱建物跡は、3×2間の北西—南東棟の建物が、調査区の東側南北方向に並ぶ配置となる。主軸方向は、N-Eへ 27° ～ 30° でほぼ一致する建物となっている。第1・2号掘立柱建物跡は、調査区中央から西側に東西方向に並ぶ配置となる。第2号掘立柱建物跡は、3×2間の北西—南東方向の建物となっており、主軸方向N-Eへ 28° となっており、第3～5号掘立柱建物跡とほぼ一致する。第1号掘立柱建物跡は、3×2間で唯一北東—南西棟となる。主軸は、N- 53° -Eの方位を持ち、第2～5号掘立柱建物跡とほぼ直行する主軸方位をとる建物となっている。

第Ⅰ～Ⅱ期における竪穴住居跡と掘立柱建物跡の配置をみると、北東—南西または北西—南東方向の主軸方向が概ね一致し、調査区内でL字形の規則的な配置をとる集落と判断される。遺構出土遺物は概して少なく、ほとんどが覆土下層より廃棄された状態で破片となって出土しており、存続期間の短い集落であったことがうかがえる。

本遺跡は、郡家初源期の7世紀末から8世紀初頭に属する、竪穴住居跡と掘立柱建物跡（3×2間の側柱建物）の混在する一般的な東国集落であるが、7世紀以前の古墳時代までの集落構造とは異なる配置の企画性を持つことに特徴がある。

今後の課題として、本遺跡北側1kmに位置する、同時期の大領クラスの豪族居宅跡と推定された百済木遺跡（川本町遺跡調査会：2003）や、南側に隣接する終末期古墳群である立野古墳群（江南町教育委員会：2005）との関係について検討を要するものと考えられる。

第2表 第4号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
7-1	第4号住居跡	須恵器 甕	(24.0)	(2.1)	—	A	2.5Y 5/1	A	5%	内外面灰釉有
7-2		須恵器 坏	—	(1.2)	(5.8)	ABIJ	2.5Y 6/2	B	20%	
7-3		土師器 甕	(21.2)	(3.9)	—	AEI	7.5YR 6/6	B	5%	

第3表 第5号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
9-1	第5号住居跡	土師器 坏	(11.9)	3.3	—	ABEIKM	2.5YR 5/8	B	25%	内面：暗文
9-2		土師器 坏	(13.0)	(3.5)	—	ABDM	7.5YR 5/4	B	20%	内面：暗文

第4表 第6号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
10-1	第6号住居跡	須恵器 坏	(13.0)	(3.4)	—	ABI	7.5Y 5/1	B	20%	
10-2		須恵器 碗	(14.0)	(4.9)	—	AEI	2.5Y 8/2	B	20%	
10-3		埴	(22.0)	(11.5)	—	AEJ	7.5Y 4/6	B	20%	
10-4		土錘	長5.3、径1.8、孔径0.5、重量15							100%

第5表 第7号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
12-1	第7号住居跡	土師器 甕	—	(4.1)	(6.0)	ADEI	5YR 4/6	B	10%	
12-2		土師器 甕	—	—	—	ABDIM	10YR 5/6	B	10%	

第6表 第8号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考	
14-1	第8号住居跡	土師器 坏	(13.0)	(3.3)	—	ABCEM	5YR 6/6	B	25%		
14-2		土師器 坏	(14.4)	(2.8)	—	ABDKM	7.5YR 8/8	B	15%		
14-3		土師器 坏	(14.4)	(2.5)	—	ADIM	2.5YR 5/6	B	20%		
14-4		土師器 甕	—	(8.2)	(6.9)	ABCDEM	7.5YR 7/8	B	20%		
14-5		土師器 甕	(21.0)	(3.7)	—	ABI	10YR 5/6	B	10%		
14-6		金銅製耳環	長径2.6、短径2.3、厚0.7、重量12							100%	
14-7		鉄釘	長6.4、幅0.4、厚0.6、重量4								

第7表 第9号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
16-1	第9号住居跡	土師器 甕	—	(18.5)	—	ABDJK	7.5YR 6/6	B	40%	
16-2		土師器 甕	(18.3)	(6.2)	—	ABDEHMN	5YR 5/6	B	5%	

第8表 第10号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	法 量						残存率	備考
17-1	第10号住居跡	磨石	長9.7、幅7.5、厚2.6、重量299						100%	磨面：両面、敲打：片端部、砂岩

第9表 第11号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
19-1	第11号住居跡	土師器 坏	(12.1)	(3.3)	—	ACI	7.5YR 6/6	B	20%	
19-2		土師器 坏	(14.1)	(3.1)	—	ACI	10YR 6/6	B	20%	
19-3		土師器 坏	(16.2)	(3.1)	—	ABCDM	2.5YR 6/6	B	20%	
19-4		土師器 甕	(17.9)	(14.5)	—	ABDEM	10YR 7/6	B	20%	
19-5		須恵器 甕	—	—	—	ABDFMN	2.5Y 6/1	A	—	

第10表 第12号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
21-1	第12号住居跡	須恵器 坏	(12.8)	(2.0)	—	ABM	2.5Y 7/1	B	20%	
21-2		須恵器 坏	(14.5)	(3.1)	—	ABCI	2.5Y 7/3	B	20%	
21-3		須恵器 坏	(14.0)	(3.2)	—	ABMN	2.5Y 6/2	B	15%	
21-4		須恵器 坏	(12.4)	(3.5)	(5.8)	ABCI	10YR 7/4	B	20%	
21-5		須恵器 甕	(21.0)	(6.1)	—	ABCI	5Y 7/2	B	20%	
21-6		須恵器 甕	(23.0)	(6.2)	—	ABDM	2.5Y 5/1	B	20%	
21-7		須恵器 甕	(20.9)	(6.7)	—	ABCI	2.5Y 7/2	B	20%	
21-8		土師器 甕	(17.0)	(5.0)	—	ABDGHIM	2.5YR 6/6	B	15%	
21-9		土師器 甕	(20.4)	(4.6)	—	ABCDEGIM	5Y 6/6	B	15%	
21-10		土師器 甕	(18.2)	(5.0)	—	ABDEGIM	7.5YR 6/6	B	15%	
21-11		土師器 甕	(18.6)	(5.5)	—	ABCDEHKMN	2.5YR 5/8	B	15%	
21-12		土師器 甕	(18.0)	(7.8)	—	ABEIJ	5YR 6/8	B	8%	
21-13		土師器 甕	(20.6)	(6.2)	—	ACI	5YR 6/6	B	15%	
21-14		土師器 甕	(20.6)	(4.8)	—	ACI	5YR 6/8	B	15%	
21-15		土師器 甕	—	(2.6)	(3.4)	ABCDEHIM	2.5YR 6/8 8	B	20%	
21-16		土師器 甕	—	(4.9)	—	ABDJK	5YR 6/6	C	10%	
21-17		土師器 甕	(18.4)	(11.8)	—	ABDEGHKMN	5YR 7/6	B	25%	
図版13	鉄滓	長12.0、幅9.0、厚4.0、重量494								

第11表 第13号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考	
23-1	第13号住居跡	須恵器 坏	(15.5)	(3.6)	—	ABCI	2.5Y 7/3	B	20%		
23-2		須恵器 坏	(17.1)	(4.1)	—	ABC	2.5Y 7/2	B	25%		
23-3		須恵器 坏	12.4	4.0	6.1	ABFMN	N 6/1	B	70%		
23-4		須恵器 蓋	—	(1.0)	—	ABEI	5Y 6/1	B	10%		
23-5		須恵器 坏	—	(1.0)	(10.0)	AB	7.5Y 5/1	B	20%		
23-6		須恵器 蓋	—	(2.2)	(15.8)	ABMN	2.5Y 5/1	B	10%		
23-7		須恵器 蓋	(18.5)	(2.5)	—	ABCIJ	5Y 6/1	B	40%		
23-8		須恵器 甕	23.8	(7.8)	—	ABIN	10YR 4/1	A	20%		
23-9		土師器 坏	(15.2)	(3.1)	—	ABDIJ	7.5YR 6/6	A	20%		
23-10		土師器 坏	(15.6)	(2.7)	—	ABDK	7.5YR 7/6	B	25%		
23-11		土師器 坏	(13.6)	3.6	(4.6)	ABCI	7.5YR 6/6	B	30%		
23-12		土師器 坏	(14.0)	(3.3)	—	ABIK	5Y 6/6	B	20%		
23-13		土師器 坏	(15.1)	(4.2)	—	ABCHKM	5YR 6/6	B	30%		
23-14		土師器 坏	(13.9)	(4.8)	—	ABCJ	7.5YR 5/8	B	50%		
23-15		土師器 坏	(12.4)	(4.4)	—	ABEI	2.5YR6/8	B	25%		
23-16		土師器 坏	(16.4)	3.8	(3.0)	ABDIJK	2.5YR 5/8	A	25%	内面：暗文	
23-17		土師器 坏	(12.4)	(3.5)	—	ABCI	7.5YR 6/6	B	25%		
23-18		土師器 坏	(14.2)	(4.0)	—	ABRMN	7.5YR 6/6	B	30%		
23-19		土師器 坏	(12.4)	(3.1)	—	ABDHIM	5YR 6/6	B	20%		
24-20		土師器 甕	(16.7)	(6.6)	—	ABCIH	10YR 7/6	B	20%		
24-21		土師器 甕	(22.0)	(5.5)	—	ABCI	5YR 6/6	B	20%		
24-22		土師器 甕	(21.0)	(9.5)	—	ABDIKM	7.5YR 7/4	B	30%		
24-23		土師器 甕	(23.0)	(4.8)	—	ABCDGI	5YR 6/4	B	20%		
24-24		土師器 甕	(21.4)	(7.4)	—	ABCDIN	5YR 6/6	B	25%		
24-25		土師器 甕	(18.4)	(9.5)	—	ABEI	5YR 6/8	B	20%		
24-26		土師器 甕	(23.1)	(6.3)	—	ABCI	7.5YR 6/6	B	20%		
24-27		土師器 甕	(20.4)	(22.0)	—	ABCDEHMN	7.5YR 6/8	B	20%		
24-28		土師器 甕	(22.4)	(24.1)	—	ABDEHIKM	7.5YR 6/6	B	20%		
24-29		土師器 台付甕	—	(4.3)	8.9	ABCIH	10YR 7/4	B	15%		
24-30		鉄製品	長(3.2)、幅1.9、厚0.3、重量5								
25-31		石製品	長14.4、幅13.5、厚2.9、重量1054						100%		磨面：片面、敲打：両縁、閃緑岩
25-32		砥石	長(8.2)、幅5.0、厚4.8、重量288								
25-33		石製品	長14.8、幅14.7、厚3.4、重量1075						100%		磨面：両面、敲打：両端部、砂岩

第12表 第14号住居跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
26-1	第14号住居跡	土師器 坏	(11.2)	(2.4)	—	ABDGMN	5YR 6/6	B	20%	
26-2		土師器 坏	(15.2)	(3.5)	—	ABDGM	5YR 6/8	B	10%	
26-3		須恵器 蓋	(16.0)	(1.7)	—	AB	7.5Y 7/1	B	10%	
26-4		須恵器 蓋	(16.5)	(1.1)	—	ABI	5Y 6/3	B	10%	
26-5		須恵器 蓋	(18.0)	(2.1)	—	AB	5Y 6/2	B	10%	
26-6		土師器 甕	(15.1)	(6.4)	—	ABCDEGM	5YR 6/6	B	10%	
26-7		土師器 甕	(21.0)	(6.0)	—	ABHIMN	7.5YR 6/4	B	15%	

第13表 掘立柱建物跡出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
29-1	第3号掘立柱建物跡	土師器 甕	(22.0)	(2.1)	—	ABDIKM	5YR 6/8	B	10%	
31-1	第5号掘立柱建物跡	土師器 坏	(14.0)	(3.4)	—	ABCM	7.5Y 6/6	B	15%	
31-2		土師器 甕	—	(3.5)	(4.4)	ABDFIMN	10YR 7/4	B	15%	

第14表 遺構外出土遺物觀察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
32-1	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDEM	10YR 7/3	B	—	破片 諸磯式土器
32-2	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDEKM	10YR 7/3	B	—	破片 諸磯式土器
32-3	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDEKM	10YR 6/2	B	—	破片 諸磯式土器
32-4	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDEKM	10YR 5/3	B	—	破片 諸磯式土器
32-5	遺構外	縄文土器	—	—	—	ADEMN	7.5YR 6/8	B	—	破片 連弧式土器
32-6	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDEIM	5YR 6/4	B	—	破片 加曾利E式土器
32-7	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDEM	10YR 7/6	B	—	破片 胸部隆帯文系土器
32-8	遺構外	石鏃	最大長2.6、最大幅1.3、最大厚0.8、重量2.4					—	100%	凸基有莖 フォルンフェルス
32-9	遺構外	石鏃	最大長(1.9)、最大幅1.5、最大厚0.4、重量0.9					—	90%	凸基有莖 黒曜石
32-10	遺構外	剥片石器	最大長8.7、最大厚2.0、重量111.5					—	100%	泥岩
32-11	遺構外	礫器	最大長9.6、最大幅8.2、最大厚4.2、重量320.2					—	100%	泥岩
32-12	遺構外	打製石斧	最大長12.0、最大幅8.2、最大厚3.0、重量324.1					—	100%	分銅形 フォルンフェルス
32-13	遺構外	砥石	最大長(8.2)、最大幅8.4、最大厚1.0、重量99					—	80%	砂岩
32-14	遺構外	砥石	最大長13.9、最大幅(9.6)、最大厚2.2、重量356					—	90%	砂岩
33-15	遺構外	土師器 坏	(15.0)	(3.6)	—	ABDIJ	10YR 6/6	B	15%	
33-16	遺構外	煙管	長3.5、最大幅1.1、最少幅0.5、重量3					—	100%	吸口部 青銅製
33-17	遺構外	レンガ	長23.2、幅10.9、厚6.2cm、重量2,400					B	100%	刻印 T. Y. A.

引用・参考文献

- 岩比田遺跡調査会 1983『岩比田』
- 小澤國平 1964「江南・権現山窯跡」『台地研究』第14号 台地研究会
- 亀井正道 1978「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』第三一〇号 東京国立博物館
- 川本町遺跡調査会 2003『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第8集
- 熊谷市教育委員会 2009『箕輪遺跡4次、5次 中廊遺跡3次 西浦遺跡 元境内遺跡4次 宮脇遺跡2次 諏訪協遺跡』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 熊谷市教育委員会 2010『原谷遺跡、寺内遺跡10次、中島遺跡2次、西遺跡3次、一本木前遺跡6次』
- 熊谷市教育委員会 2011『埼玉県指定史跡「塩古墳群」の調査』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 熊谷市教育委員会 2013『前中西遺跡 西別府館跡 王子西遺跡 立野遺跡』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 熊谷市宮下遺跡調査会 2010『宮下遺跡Ⅱ』熊谷市宮下遺跡調査会埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 江南町 1995『江南町史 資料編1 考古』
- 江南町教育委員会 1988『本田東台 上前原』江南町文化財調査報告書第8集
- 江南町教育委員会 2002『寺内遺跡範囲確認調査関連報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 江南町教育委員会 1996『丸山遺跡』江南町文化財調査報告書第11集
- 江南町教育委員会 1999『塩古墳群 狸塚27号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財調査報告書第12集
- 江南町教育委員会 2005『立野古墳群発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 江南町教育委員会 2006『上前原遺跡第2次発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- 江南村教育委員会 1985『江南遺跡群Ⅱ（宮下遺跡 元稻荷遺跡）』江南村文化財調査報告書第5集
- 江南町千代遺跡群発掘調査会 1999『千代遺跡群—弥生・古墳時代編— 江南町千代遺跡群発掘調査報告書2』
- 埼玉県遺跡調査会 1974『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第22集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『桜山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第162集
- 柳田敏司 1962「踊る埴輪を出土した前方後円墳について」『埼玉研究』第六号
- 嵐山町教育委員会 1987『古里古墳群 北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査』嵐山町遺跡調査会報告2
- 立正大学熊谷校地遺跡調査室 1979『遺跡調査室年報Ⅰ』
- 立正大学博物館 2008『野原古墳群発掘調査報告書』館蔵資料「基礎文献」叢刊第3輯

写 真 图 版



桜山遺跡 航空写真（昭和58年11月撮影）

図版 2



調査区全景写真（北より）



調査区垂直写真



第 4 号住居跡（南東より）



第 4 号住居跡カマド・貯蔵穴



第 4 号住居跡カマド



第 4 号住居跡調査風景



第 4・5 号住居跡調査風景

図版 4



第5号住居跡（東より）



第5号住居跡床面確認状況



第5号住居跡カマド



第5号住居跡調査風景



第5号住居跡カマド調査風景



第6号住居跡（南より）



第6号住居跡掘り方（西より）



第6号住居跡・第2号掘立柱建物跡



第6号住居跡・第2号掘立柱建物跡（東より）

図版 6



第7号住居跡（南より）



第7号住居跡カマド



第7号住居跡貯蔵穴



第7号住居跡カマド・貯蔵穴



第4・5・7号住居跡調査風景



第 8 号住居跡（北より）



第 8 号住居跡遺物出土状態（北より）



第 8 号住居跡耳環出土状態



第 8 号住居跡カマド



第 8 号住居跡掘り方（北より）

図版 8



第9号住居跡（南東より）



第10号住居跡（南より）



第11号住居跡（南東より）



第12号住居跡（北より）

図版10



第13号住居跡（南西より）



第13号住居跡遺物出土状態



第13号住居跡遺物出土状態



第13号住居跡カマド



第14号住居跡（南より）



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡・第6号住居跡



第1号掘立柱建物跡確認状況



第2号掘立柱建物跡確認状況



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡

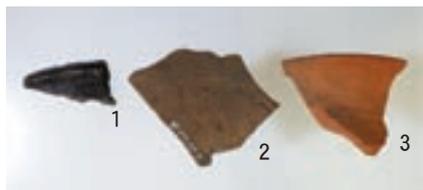


第4・5・7～9号住居跡、第1・2・4号掘立柱建物跡



第10～13号住居跡、第3号掘立柱建物跡

图版12



第4号住居跡出土遺物



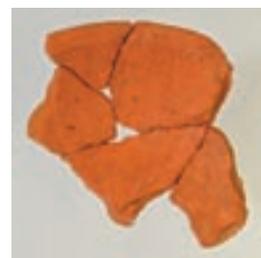
第5号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土土錘



第5号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土耳環



第8号住居跡出土鉄釘



第9号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物



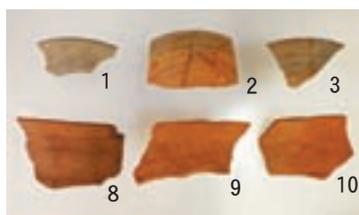
第10号住居跡出土遺物



第11号住居跡出土遺物



第11号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



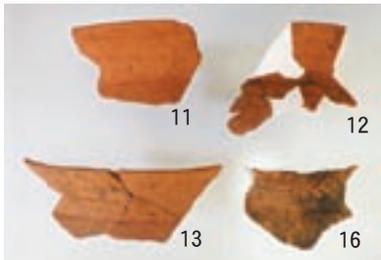
第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



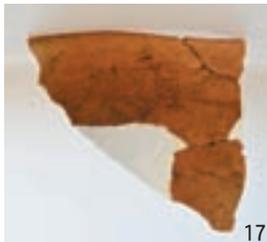
第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土鐵滓



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物

图版14



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



16



第13号住居跡出土遺物



17

第13号住居跡出土遺物



18

第13号住居跡出土遺物



19

第13号住居跡出土遺物



20

第13号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物



22

第13号住居跡出土遺物



26

第13号住居跡出土遺物



27

第13号住居跡出土遺物



28

第13号住居跡出土遺物



29

第13号住居跡出土遺物



30



第13号住居跡出土鉄鎌



31

第13号住居跡出土遺物



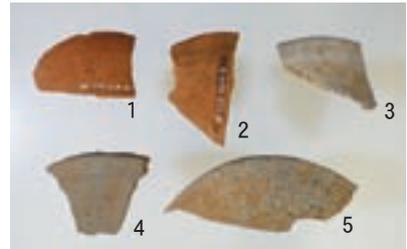
第13号住居跡出土砥石



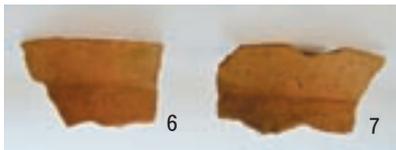
同上砥石线条痕



第13号住居跡出土遺物



第14号住居跡出土遺物



第14号住居跡出土遺物



掘立柱建物跡・遺構外出土遺物



遺構外出土縄文式土器



遺構外出土石鏃



遺構以外出土石鏃



遺構外出土レンガ



遺構外出土石器



遺構外出土煙管

報告書抄録

ふりがな	さくらやまいせき							
書名	桜山遺跡							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編集者名	森田安彦							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2016（平成28）年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)			
さくらやまいせき 桜山遺跡	くまがやしいたいばん 熊谷市板井1616番2	11202	65-053	36° 6′ 35″	139° 18′ 34″	20030701 ～ 20030930	4,092	公園造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桜山遺跡	集落	縄文時代 奈良平安時代	住居跡 11 掘立柱建物跡 5	縄文土器 石器 土師器 須恵器		住居跡より金銅製耳環1が出土		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第23集

桜山遺跡

平成28年3月25日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷株式会社

